



スポーツツーリズムコンテンツ創出事業

**日本神話から今に続く、日本発祥の武道。  
相撲と江戸文化を体感し、始まりの地を訪ねる。**

事業報告書

令和6年3月

団体名：株式会社地球の歩き方



事業実施概要	p2
プロジェクト推進経緯　＜ガントチャート＞	p3
事業実施の流れとまとめ	P4
KPIの状況と地域資源を活かす工夫および 将来的に国内外に選ばれるコンテンツになるための工夫点	P5
実施した事業内容	P6
今後に向けて	p55



「日本神話から今に続く、日本発祥の武道。相撲と江戸文化を体感し、始まりの地を訪ねる。」 団体名：株式会社地球の歩き方

- 相撲は、古事記、日本書紀にも記される、日本発祥の武道。祭事儀礼や、日本文化とのかかわりも深く、力士の姿は、江戸時代から変わっていない。
  - 現在の大相撲では、多くの外国人力士も活躍しており、海外巡業も、アメリカ、ヨーロッパ、アジア、東南アジアなど、世界各地で行われ成功を収めている。また、アマチュア相撲大会を主催する国際相撲連盟には87カ国が加盟。
- 世界相撲選手権大会、世界女子相撲選手権大会は毎年開催されている。大相撲の本場所ツアーは外国人人気も高い。

相撲は海外での知名度、人気も高く、伝統文化や日本人の精神文化にも触れられるインバウンド誘客にも繋がるコンテンツ。

「相撲」の現況

連携する自治体の課題

●島根県出雲市

最初の相撲といわれる「国譲り神話」や、相撲の祖と言われる「野見宿禰」が出雲の国の人だったことから、「相撲のはじまりの地」としての物語があるが、観光には未活用。出雲大社参拝だけの日帰り客の滞在時間延長や、インバウンド誘客へのスピード化も図りたい。

●東京都墨田区

「相撲の聖地・両国」としてコロナ禍以前、相撲部屋の朝稽古とまち歩きツアーなどを提供していた。十分な復活には至っておらず、販路開拓の課題がある。「ものづくりのまち」として産業観光推進に取り組んでいる。



活用

地域特有の資源を活かす工夫

コンテンツ開発するエリア「相撲の聖地・両国」+「向島エリア」

＜大相撲文化が花開いた江戸時代を感じる「まち歩きと体験」を高付加価値化する地域資源の発掘＞

- ①「相撲の聖地」とされる両国エリアには、すみだ北斎美術館、刀剣博物館、旧安田庭園、江戸東京博物館など、江戸文化を感じるまち歩きをコンテンツに取り入れるため、高付加価値化に対応できる多言語ガイド育成にも取り組む。
- ②墨田区では、東京屈指の「ものづくりのまち」という特性を活かし産業観光を推進している。多くの職人たちが伝統の技を継承する優れたものづくりを活用し地域経済に寄与できる工房見学や体験コンテンツの高付加価値化に取り組む。
- ③高付加価値化に向け、多くの料亭や和菓子の老舗・名店が立ち並び「向島エリア」の「向島花街文化」を活用し、その可能性をFAMツアー等で検証し造成に繋げる。

コンテンツ開発するエリア「相撲のはじまりの地・出雲」+「松江藩エリア」

＜「相撲のはじまりの地」出雲と、江戸時代の松江藩と相撲の史実掘り起こしによる高付加価値化周遊プラン開発＞

- ①出雲市の稲佐の浜が、相撲のはじまりと言われる「国譲り神話」の舞台。神話の時代から相撲との関わりが深く、江戸時代、松江藩では有名力士「雷電為右衛門」など多くの力士を抱えていた。今も、當為知相撲（松江市美保神社）や隠岐古典相撲（隠岐の島）など特徴ある神事相撲が伝承されている。文武両道で相撲の神様と言われる「野見宿禰」の物語、松江藩と相撲の関わりや縁の地、伝承文化を、当事業で協力いただき、出雲大社や島根県立古代出雲歴史博物館学芸員、地元の方々と共に掘り起こし、コンテンツに活用していく。
- ②アクセスの悪い箇所もあり、二次交通には、出雲市が取り組む、専門ガイド同行の観光タクシープラン「うさぎ号」や周遊バスプラン「しんわ号」を活用し、新たな「相撲」テーマによる高付加価値周遊コンテンツ造成に取り組む。

地域威厳掘り起こし、コンテンツ造成・ツアープラン作成（7～9月）	FAMツアー・コンテンツの磨き上げ（10～12月）	海外エージェントとのオンラインウェビナー（1月）
・地域住民意識醸成セミナー・多言語ガイド育成（9月）		広報・PR（1月～）

- ①地域の価値波及効果（推奨意向、継続訪問の意向）※公募要領＜留意点＞に示されたKPI案より選択  
国内DMCによるFAMツアー、国内旅行業者、海外エージェント対象のオンラインウェビナーアンケートから抽出。
- 顧客推奨意向：顧客へ勧めてみたいと思う方80%以上 ●顧客送客意向：顧客を送客したいと思う方70%以上
- ②墨田区の「相撲コンテンツ」と「江戸文化」および「産業観光」の組み合わせによる高付加価値商品造成：1件以上
- ③出雲市「相撲のはじまりの地」を訪ねるツアー造成：1件

- ①地域への関心度の向上 ※公募要領＜留意点＞に示された「KPI案」より選択  
地域機運醸成セミナー参加者アンケートから抽出。
- 地域の相撲文化への愛着度：地域にとって「相撲」は重要なコンテンツだと考える人70%以上
- 自分の知人等にもコンテンツを紹介したいと思う人70%以上
- ②継続に向けて、当事業参画の墨田区、出雲市、相撲関係者、国内DMC等の連携を図る。
- FAMツアーや意見交換会等を通し事業者同士が連携し、事業終了後も継続してツアー造成や販売ができるようになる。

●本事業を含む日本らしいスポーツホスピタリティについて：「する・みる・ささえる」スポーツを行う人々が、そこに「あつまる」ことで、これまで以上に「より良く楽しむ」ことを可能とする取組・行為全般を示す概念である「日本らしいスポーツホスピタリティ」。今回テーマとする「相撲」では、インバウンドはもちろん、日本人も詳しく知らない相撲の様々な決まり手や禁じ手、相撲の歴史や物語、執り行われる様々な神事、力士の所作の意味などを「知る、学ぶ」ことに注力したコンテンツ造成に取り組む。

国内外の参加者、また、受け入れ地域の方々も共に、相撲への理解を深め、より一層、興味を持ち楽しんで見ていただき、相撲ファンとなって、今後も「相撲」が連綿と続くよう支えてくれる人を育てることができるコンテンツを目指している。

取組の概要

- 1 「相撲」武道コンテンツの開発、商品化  
・従来の相撲朝稽古の見学と力士との交流を定番商品として販売するための支援。  
・「相撲地方巡業」観戦を軸とした新たなツアー造成と、OTA「Viator」での商品販売
- 2 「相撲と江戸文化」を体験する高付加価値コンテンツ開発とFAMツアーの実施  
・「両国エリア+向島エリア」を巡り、相撲と江戸文化体験をブラッシュアップする。
- 3 「相撲の始まりの地を訪ね、神事との関わりを紐解く」高付加価値コンテンツ造成と島根県出雲市へのFAMツアー実施  
・江戸時代、有名力士を多く輩出した「松江藩」エリアも舞台とし、「出雲市+松江藩エリア」での特別な体験を盛り込んだ周遊ツアーを開発する。
- 4 相撲コンテンツを継続実施するためのネットワークの形成  
・当事業のコンテンツ開発に関わる墨田区、出雲市の自治体および団体、旅行会社等の連携強化を図るためオンラインでの意見交換会を実施。
- 5 相撲コンテンツによる誘客に向け、墨田区、出雲市のガイド等を中心とした「地域住民意識醸成セミナー」の開催  
・受け入れ地域の方々に、より興味を持ってもらえるよう、相撲関係者や島根県立古代出雲歴史博物館学芸員などを講師に招聘し、相撲についての知識を深めていただくためのセミナーをオンラインとオフラインのハイブリッド型で実施する。
- 6 相撲の本質を伝えられる「多言語ガイドの育成研修」の実施  
日本文化や儀礼、風習などと深く関わる相撲の本質を伝えるためのポイントを学ぶ研修を、スーパーガイドを講師に迎えて実施する。
- 7 海外エージェントへのダイレクトな情報発信・商品オンラインウェビナー  
日本への送客実績を持ち、日本文化や歴史を好む顧客を持つ海外エージェントとのオンラインウェビナーを開催し、ダイレクトな情報発信を行うと共に、送客に向けた改善点や要望を伺い、コンテンツのブラッシュアップに努める。
- 8 多言語サイトを活用した広報・PR  
多言語サイト（英語・中国語繁体字・簡体字・日本語）「Good Luck Trip」での情報発信、および、在日訪日外国人のための認知度No.1生活情報サイト「GaijinPot」を活用し、訪日/在日外国人に対してより広い訴求を実現。





大項目	小項目	取組内容	進捗状況	実施時期	令和5年							令和6年		
					6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
0	全体													
	0-1	中間報告書	完了	予定										
				実績										
	0-2	最終報告書	実施	予定										
				実績										
	0-3	精算	実施	予定										
				実績										
1	取組 1	「相撲」武道コンテンツの開発、商品化,「相撲と江戸文化」を体験する高付加価値コンテンツ開発												
	1-1	地域資源調査	完了	予定										
				実績										
	1-2	墨田区コンテンツ開発	完了	予定										
				実績										
	1-3	出雲市コンテンツ開発	完了	予定										
				実績										
	1-4	地方巡業ツアー開発	完了	予定										
				実績										
2	取組2	FAMツアーの実施												
	2-1	行程作成	完了	予定										
				実績										
	2-2	参加者調整	完了	予定										
				実績										
	2-3	墨田区FAM実施	完了	予定										
				実績										
	2-4	出雲市FAM実施	完了	予定										
				実績										
	2-5	意見交換、アンケート取りまとめ	完了	予定										
				実績										
	2-6	検証・分析	完了	予定										
				実績										

大項目	小項目	取組内容	進捗状況	実施時期	令和5年							令和6年			
					6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
3	取組3：相撲コンテンツを継続実施するためのネットワークの形成、「地域住民意識醸成セミナー」の開催、多言語ガイドの育成														
	3-1	地域住民意識醸成セミナー計画	実施	予定											
				実績											
	3-2	多言語ガイド研修計画の作成	完了	予定											
				実績											
	3-3	講師等調整	完了	予定											
				実績											
	3-4	参加者募集	完了	予定											
				実績											
	3-5	地域住民意識醸成セミナー開催	未実施	予定											
				実績											
	3-6	多言語ガイド研修の実施	完了	予定											
				実績											
	3-7	意見交換、アンケート取りまとめ	実施	予定											
				実績											
	3-8	検証、分析	実施	予定											
				実績											
4	取組4：海外エージェントへのニュースレター 配信														
	4-1	海外エージェントへのアプローチ	実施	予定											
				実績											
	4-2	ニュースレター内容検討・作成	実施	予定											
				実績											
	4-3	ニュースレター配信	未実施	予定											
				実績											
	4-4	意見交換、アンケート取りまとめ	未実施	予定											
				実績											
	4-5	検証、分析	未実施	予定											
				実績											
5	取組5：多言語サイトを活用した広報・PR														
	5-1	多言語サイト掲載内容の検討	完了	予定											
				実績											
	5-2	取材、撮影	完了	予定											
				実績											
	5-3	掲載記事制作	完了	予定											
				実績											
	5-4	多言語サイトへの掲載	完了	予定											
				実績											



### 本事業で解決に取り組んだ課題

#### 島根県出雲市

- 「相撲のはじまりの地」としての物語があるが、観光には未活用である点
- 出雲大社参拝だけの日帰り客の滞在時間の延長
- インバウンド誘客へのスピード化

#### 東京都墨田区

- コロナ後十分な復活には至っておらず、相撲朝稽古見学などは商品造成と販路開拓が必要
- 「ものづくりのまち」としての産業観光推進

### 取組状況

#### 島根県出雲市

相撲ゆかりの地を巡る周遊プランを造成・視察 ○  
実施期間 10/25~26  
出雲、松江城、足立美術館、たたら製鉄(体験付き)、出雲巡業等



#### 東京都墨田区

○実施期間 10/6~7  
朝稽古見学+まち歩きツアー、相撲ショー、刀剣博物館、和菓子作り体験等



### 効果検証方法

#### ●ターゲット

・インバウンド：モダンラグジュアリー層、SIT層  
相撲を通じて日本の伝統や精神文化に触れることや、伝統的な産業観光や江戸時代の文化体験を行うコンテンツは、このターゲット層の物事の本質を大事にし、本物を体験したいというニーズに合致している。

・国内居住者：アクティブシニア層

#### ●効果検証方法

- ①通訳ガイド研修および地域住民意識醸成セミナー参加者アンケートから検証。
- ②国内DMCによるFAMツアー参加者アンケートから検証。

### 効果検証結果

#### ①通訳ガイド研修参加者

10/31 墨田区 参加者 45名  
講義「外国人にとって魅力に満ちた相撲と刀剣」 The tool of War: Japanese weapons and samurai  
・相撲と江戸文化の繋がりや、武士道への理解が深まったとの声をいただき、墨田区における重要で魅力的なコンテンツであることに賛同いただいた。

#### ②国内DMCによるFAMツアー参加者

・FAMツアー参加者は、参加した全社がインバウンド富裕層向けコンテンツとしての送客意向を示している。テーマ性が高く、日本の武道・歴史に関心を持つ顧客ニーズに応えている点、地域独自の訴求性を押さえている点を評価いただいた。

### 新たな課題や改善点

#### 1. 相撲

地方巡業の日程発表のタイミング遅いため、販売期間の短さが課題

#### 2. 出雲

相撲の発祥の地としての外向けへ打ち出しが出来ておらず、相撲にまつわる観光コンテンツが弱い

#### 2. 出雲

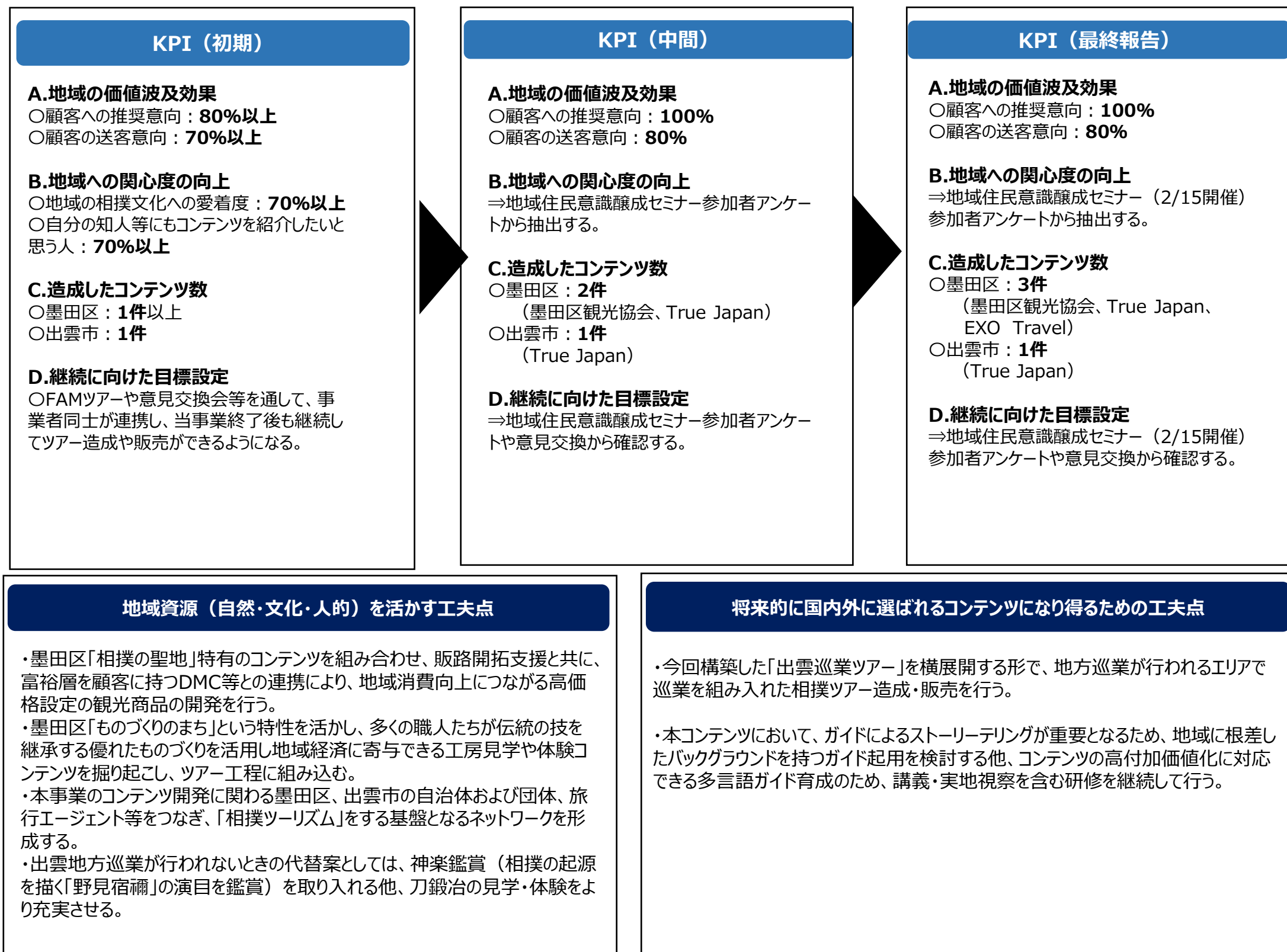
神話、手形、お墓など形として「Wow」を提供しにくい

### 次年度以降の自走化に向けた取組案及び事業体制

・旅行エージェント各社と協議を重ねツアー構成をブラッシュアップし、次年度以降に継続的に販売できる商品設計・体制作りを行う。

・「地域住民意識醸成セミナー」にて、受け入れ地域のガイド・事業者等に向けて、専門家による相撲ツーリズムの講義と今回の取り組み紹介を行い、当事業のコンテンツ開発に関わるネットワーク形成につなげる。

・日本への送客実績を持ち、日本文化や歴史を好む顧客を持つ海外エージェントにNewsletterを発行し、ダイレクトな情報発信を行うと共に、送客に向けた改善点や要望を伺い、コンテンツのブラッシュアップを行う。



## 実施した事業内容





## 刀剣と相撲/墨田地域の相撲ガイド養成研修 2023年10月31日

True Japan Tour 株式会社では、株式会社地球の歩き方から一部受託で、スポーツ庁の補助事業の実施に取り組んでいます。

事業名は、「日本神話から今に続く、日本発祥の武道。相撲と江戸文化を体験し、始まりの地を訪ねる」です。

True Japan Tour 株式会社は、以下の2つの事業に取り組んでいます。

### 1 地方巡業ツアー

- ・ [Sumo Wrestling in Izumo / Blacksmith Shop, Adachi Museum and Izumo Taisha Tour](#)
- ・ [Regional Tournaments of Sumo Wrestling / Himeji Castle and Kurashiki Tour](#)

### 2 墨田区区内のツアー

- ・ [Sumo Morning Training Experience and the Sword Museum](#)
- ・ [Sumo Morning Training Experience in Sumidaku](#)

本研修は、上記2のガイドを養成するための研修です。したがって、特別割引の受講料となっています。

## 全体のスケジュールと受講料等

### スケジュール

【第1部 米原理事長による講義】8時30分～9時30分

【第2部 Ash先生による講義】9時45分～11時45分

【昼食（各自自由食）】11時45分～13時15分

【第3部 実地研修】13時15分～16時30分

### 日時・会場

2023年10月31日（火）

墨田区みどりコミュニティセンター

多目的ホール 8時から11時45分

住所：〒130-0021 東京都墨田区緑3-7-3

※両国駅から徒歩10分程度

詳細は本ページの一覧下にございます。

### 受講形態

実地での参加のみとなります。

※Zoomでのライブ配信はございません。

※Ash講師の講義は追って動画受講を販売いたします。（発売日は、11月中旬以降となります）。この場合の受講料は、会員：2,800円、一般：3,500円、フレンドシップ団体・TJスクール生：3,150円）

### 受講料・定員

受講料：IJCEE会員限定 4,800円

午前・午後合わせた金額です。

また、刀剣博物館の入場料を含みます。

部分受講でも、値段は変わりません。

国庫補助事業につき、特別割引となっています。

※北斎美術館は、通訳案内士証を持参の方は、無料です。

### 相撲ガイドの資格

True Japan Tour 株式会社は、墨田区内の相撲部屋見学を2023年度の1時的なものではなく、より長期的な視野でツアーづくりを進めています。

したがって、上記プログラムのガイドは、本研修の受講者が優先されます。

なお、「相撲講座」～歴史、様式、興行など、ガイド目線で捉える講座～相撲稽古場見学のガイド派遣の条件です。

## 研修の内容紹介 / ガイド業務との関係

### 講義1 新規プログラムの紹介と墨田区の魅力(8時30分～9時30分)

講師 理事長 米原亮三

お話の内容

- ・ スポーツ庁助成事業の全体
- ・ 新しい相撲稽古場見学について
- ・ 刀剣博物館について
- ・ 墨田区の歴史と、相撲興行

※相撲稽古場見学の講義資料のうち、特に、明暦の大火以降の、対岸への江戸地の拡大と、承認文化を中心にお話しします。

合わせて、日本刀などについても、お話しします。

### 講義2 Ash先生による『The Tools of War: Japanese weapons and Samurai』(シリーズ第2回) 9時45分～11時45分

刀剣博物館と北斎美術館は、日本人より、外国人の方が多く美術館です。

特に、刀剣は、外国人に人気です。相撲が大衆の娯楽の主役になったころ、日本刀も進化を遂げていました。

前回の「平安」で、日本人のほとんどが知らなかった「貴族文化の実験」を明らかにしたAsh先生だからこそ、明らかにできる日本と西洋の武具の違いが分かります。

Ash先生による英語で学ぶ日本文化シリーズ第2弾は侍と彼らの持つ優れた武勇に焦点をあてます。中世日本における武具や戦い方はどのようなものだったか？同時代の西洋諸国と対比をしながら解き明かしていきます。

また、「武士道」と、当時の侍たちの「武道」やその修練方法、特に「刀剣」に対する信念に触れます。

これらのトピックは海外から日本を訪れる旅行者の大きな興味の一つとなってきました。ガイドにとっても、より深い知識を携えておくことは非常に有益なはずで。

### 資料について

講義後に配布します。合わせて、午後のマップなども配付します。

### 第3部 午後墨田区まち歩き研修

海外からのゲストが存分に日本を味わうことが出来る街の一つ、墨田区をこのエリアに精通したベテランガイドと共に歩きます。この地域に外国人を案内する際に、重要となる視点と話すべきポイントを学びます。併せて、海外ゲストにとっても大きな興味の一つである「相撲」、墨田区の主要な相撲部屋の位置確認も行います。

○講師

- ・ 木村ゆり子氏
- ・ 花亀ゆり氏

(相撲稽古場見学の実習講師)

○コース

本所吾妻橋駅A3出口地上（再集合）→押上～両国の相撲部屋→北斎美術館（入場）／野見宿禰神社→刀剣博物館（入場）→都立安田庭園（入場）→国技館・相撲博物館（外観のみ）→江戸東京博物館（外観のみ）→JR両国駅（解散）

○ 以下の相撲部屋を訪問する予定です

- ・ 高砂部屋 元関脇 朝赤龍関
- ・ 宮城野部屋 元横綱 白鵬関
- ・ 鳴門部屋 親方 元大関 琴欧州関

基本的には、部屋に入らずに、位置確認をします。

### 刀剣博物館

今回の「日本刀の装い 豊かな刀装・刀装具と名刀展」です。

古来より刀剣類には、その目的に応じて様々な刀装・刀装具が製作されてきました。平安時代には律令制度の整備に伴い身分によって使用できる袴の様式が定められ、高位の公家は華麗な装飾が施された太刀袴を佩用し、近世以降でも太刀袴は贈答や献上などを目的に製作されました。室町時代以後に広がった打刀は、江戸時代になると登城の際に脇指と組み合わせて黒蠟色鞘の大小として指すように定められ、また、江戸時代中期以降には町衆文化の影響もあり、螺細や色彩豊かな漆に加えて色金（合金類）が施された刀装が作られました。

本展では各時代の刀剣を彩った多様な形式の刀装・刀装具類と共に、それらを製作する工程や道具、技術などについても紹介いたします。





2023年10月31日

## 「刀剣と相撲」

### ・墨田地域の相撲ガイド養成研修

特定非営利活動法人日本文化体験交流塾

理事長 米原亮三

1

- 1 本研修について
- 2 墨田区の相撲部屋
- 3 相撲の歴史・両国
- 4 北斎美術館
- 5 浮世絵の概観
- 6 刀剣博物館について

2

### 高砂部屋



本名	山崎 伊之助
生年月日	天保9年11月20日
没年月日	明治33年4月8日（62歳）
出身地	千葉県東金市
初土俵	文久元年七月場所
最高位	前頭筆頭
四股名歴	東海～松ヶ枝 ～高見山～高砂浦五郎
所属部屋	阿武松～千賀ノ浦
主な弟子	横綱 西ノ海（初代）・小錦 大関 大達・一ノ矢・朝汐（初代）

### 朝潮太郎 (3代)



1956年3月場所に優勝し、祝杯を挙げる  
（『増刊』1956年5月号より）

#### 基本情報



#### 朝潮 太郎 (あさしお たらう)

所属部屋	高砂
本名	長岡 栄弘
大関在位	昭和五十八年
生年月日	昭和30年12月
出身地	高知県室戸岬
身長	183cm
体重	186kg
得意技	突き・押し

#### 第68代横綱 朝青龍 明徳

##### ※ 基本情報

所属部屋	朝霞 → 高砂
本名	パルゴルス・ダサワドルジ
しこ名歴	朝青龍
横綱在位	平成15年3月～平成22年1月
生年月日	昭和55年9月27日
出身地	モンゴル・ウランバートル
身長	185cm
体重	154kg
得意技	右ひき・寄り・突っ張り

4

### 高砂部屋名鑑

#### 高 砂 浦五郎 たかさごうらごろう



本名	バダルチ ダシニヤム
生年月日	昭和56年8月7日
出身地	モンゴル国ウランバートル市
出身校	明德義塾高校
現役名	朝赤龍 太郎 あさせまりゅう たらう
初土俵	平成12年一月場所
最高位	西関脇
受賞歴	優勝：序二段① 十両① 三賞：殊勲① 敢闘① 技能②
通算成績	687勝679敗36休（103場所）

#### 朝乃山 広暉 あさのやま ひろき



本名	石橋 広理 いしはし ひろき
生年月日	平成6年3月1日
身長・体重	187cm・175kg
出身地	富山県富山市
出身校	富山県立富山商業高校～近畿大学
初土俵	平成28年三月場所
最高位	東大関
優勝	三段目① 幕下① 十両① 幕内①
受賞歴	三賞：殊勲② 敢闘② 技能①
四股名歴	石橋～朝乃山 英樹～朝乃山 広暉
今年の目標	もう一度、本土俵の上で相撲を取らせていただ ける事への感謝の気持ちを忘れず稽古に精進 し、幕内、三役、そして上を目指す

5



## 宮城野部屋

優勝回数45回



宮城野親方と女将さん

### 私たちの思い

昔からお相撲さんは『気は優しく力持ち』と言われています。  
そして義理人情に厚いです。  
そういう力士を私たちは育てていきたいです。  
引退したあとの第二の人生のほうが良いです。その為に社会に出て活躍  
できる人材を育てたい。  
力士として少しでも勝たせて番付を上げて出世させたいと思います。  
一人の力士の人生を現役後を見据えて育てていきたいと考えております。



6

## 鳴戸部屋

鳴戸部屋は公益財団法人日本相撲協会に所属する相撲部屋です。  
元大関琴歐洲が2015年2月に15代「鳴戸」を襲名、2017年4月に佐渡ヶ嶽部屋から分家独立し設立しました。

鳴戸 勝紀

(元大関琴歐洲)

202cm 155kg

ブルガリア出身

昭和58年2月19日生まれ

537勝337敗63休

優勝1回殊勲賞2回敢闘賞3回



8

師匠 宮城野 翔 (みやぎの) <委員>

しこ名	横綱 白鵬 (はくほう)
本名	白鵬 翔
生年月日	昭和60年3月11日生
出身地	モンゴル
生涯戦歴	1187勝247敗253休
受賞歴	優勝45回/殊勲賞3回/敢闘賞1回/技能賞2回

年寄

年寄 間垣 真翔 (まがき) <年寄>

しこ名	前頭五枚目 石浦 (いしうら)
本名	石浦 将勝
生年月日	平成2年1月10日生
出身地	鳥取県
生涯戦歴	350勝321敗108休
受賞歴	優勝0回/殊勲賞0回/敢闘賞1回/技能賞0回

幕内

西前頭九枚目	伯桜鵬 哲也 (はくおうほう)
西前頭十一枚目	北青鵬 治 (ほくせいほう)

十両

東十両十三枚目	輝鵬 智貴 (きほう)
西十両十四枚目	天照鵬 真豪 (てんしょうほう)

幕下

東幕下二十七枚目	大谷 (おおたに)
西幕下三十八枚目	宝香鵬 (ほうかほう)
西幕下四十一枚目	炎鵬 (えんほう)
西幕下四十八枚目	雷鵬 (らいほう)

7

## 相撲の歴史

時代		中央	地方
神話	力くらべ	能見宿禰と当麻くえ早	
奈良時代 平安時代	節会相撲 (3節会)	・7月7日、紫宸殿のお庭で天覧相撲 (正月15日 弓術の節会、5月5日騎射)	・1174年以降、相撲節会は、廃絶 ・相撲人が地方に散らばる ・土地相撲、神事相撲
鎌倉時代	武家相撲	・1176年 頼朝の御前で、伊豆河津三郎と俣野五郎の相撲→曾我兄弟の仇討へ ・鶴岡八幡宮で上覧相撲	
室町時代 ・桃山時代		・京都勸進相撲(秀吉時代)	地方での相撲人/大衆娯楽 ※勸進猿楽→勸進能 勸進田楽
江戸前期	勸進相撲	・京都 野相撲 ・大阪 勸進相撲 ・東京 日本橋	職業相撲 泉州、紀州、筑前、讃州、肥前、因幡等 ※大名が後援

※他の日本文化の歴史と比較して考えよう / 伊勢参り、山岳信仰、稲荷信仰、浮世絵、歌舞伎、祭り(ねぶた、阿波踊り、高山祭り等)

2





## ・相撲の原型、荒々しい「すまひ」

### 1) 神話の中の相撲に関する記述－土俵はない

①日本最古の歴史書である『古事記』(712年成立)に、相撲という言葉が使われているが、古事記の国譲りの神話の中の相撲は、神さま対神さま。実際に人間が相撲をとったという記述は『日本書紀』(720年成立)に記されている。つまり、少なくとも1300年以上前には「すまひ」(相撲)が始まっていたことになる。

＊6C初頭に作成されたものと考えられる力士の埴輪(裸にふんどし姿)が出土しているため、さらに古くから行われていたと推察される。

### ②古事記(712年成立)－国譲りの神話

神話の話。オオクニヌシが地上界(葦原(あしはら)の中つ国)を統治することをアマテラスは快く思っていなかった。タケミカヅチとタケミナカタは、互いに手を取り合って力比べをする。勝ったタケミカヅチが国の支配権を手に入れた。負けたタケミナカタは諏訪社に祭られた。

日本書紀(720年成立)野見宿禰(のみのすくね)と当麻蹶早(たいまのけはや)の力比べ

当麻蹶早(たいまのけはや)は、今の奈良県に住む力持ちの乱暴者だった。彼が治安を乱し、田の収穫も思うようにできないという苦情が多いため、天皇がはるばる今の島根県から力自慢の野見宿禰(のみのすくね)を呼び寄せ、二人に勝負をさせたのが始まり。結果は野見宿禰(のみのすくね)が圧勝。敗れた当麻蹶早(たいまのけはや)は、肋骨と腰骨を折られ、死亡。勝った野見宿禰(のみのすくね)は、野見宿禰(のみのすくね)神社に祭られている。奈良県をはじめ、東京、大阪、愛知県にも野見宿禰神社はある。

＊野見宿禰神社－野見宿禰は、今でも、「相撲の祖」「相撲の神様」として崇められ、東京都墨田区にある野見宿禰神社では、年三回の東京場所ごとに日本相撲協会関係者らが出席して、例祭が行われる。

10

### ③大名に見せる相撲

鎌倉、室町幕府の将軍や大名たちは優れた相撲人を召し抱え、相撲観覧をした。源頼朝や、織田信長などは、相撲を好んだ。地方の相撲人は、大名将軍に召し抱えられると安定した収入を得られるため、その機会を求めて京に上った。そのため、室町時代の京は、相撲の本場としてにぎわった。「大相撲」に繋がる興行(こうぎょう)が始まった。大相撲が盛んになると、江戸時代の大名たちは、そのお抱え力士を大相撲に送り込む。大名が大相撲のスポンサーとして重要な役割を果たすようになる。

### ④多くの人々に「見せる」相撲

特定のスポンサーに頼るのではなく、多くの観客から入場料をとって興行が行われるようになったのは、室町時代。勧進と言い、神社、仏寺、道、橋の修造のために相撲を開催し、観客から基金を募った。相撲が利益になることが分かり、相撲取達自身が収入を得るために相撲興行を催すようになった。そのため、以前は天皇貴族大名など限られた人が観覧した相撲だったが、多くの人々へ広がっていった。

### 4 土俵

1300年以上前に、相撲の原型と言われる「すまひ」が始まってから、江戸時代の中ごろまで、ほぼ千年の間土俵は無かった。そのため、相手を倒せば勝ちとなった。飛び入り参加も自由だった。しかし、相撲の観客が興奮し、些細なことで喧嘩になり、治安を乱すとして相撲は度々禁止された。そのため江戸時代中ごろ(元禄時代あたり)に、力士を観客から分離し、また取組を見やすくするために、土を盛った土俵上で相撲をとるようになった。土俵という境界線が出来たために、相手を倒さなくても相手を土俵から出せば勝ちになる。こうして、「押し出し」「寄り切り」といった「勝ち方」が生まれた。また、負けられないためには「押されないこと」が重要になり、「押されない」ためのわざも生まれた。「押す」「押されないように」とする力と「わざ」のやりとりが、相撲の主流になっていく。

11

## 5 相撲興行

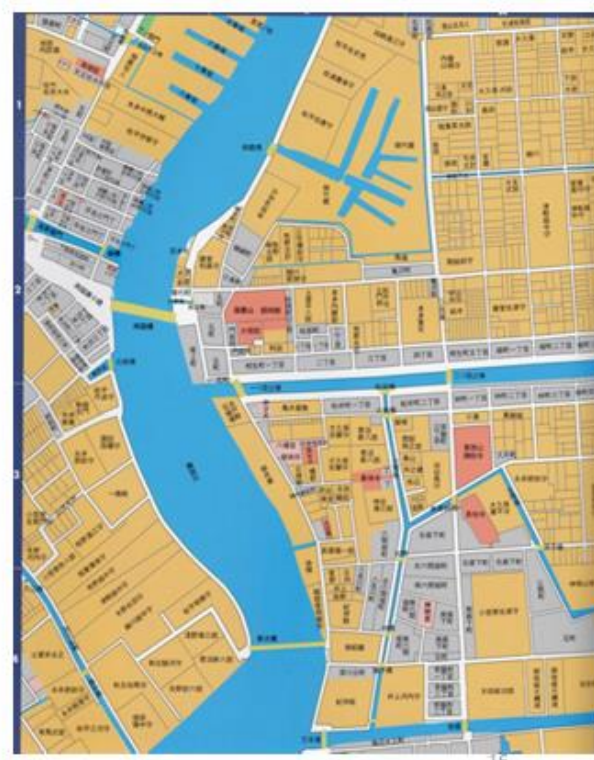
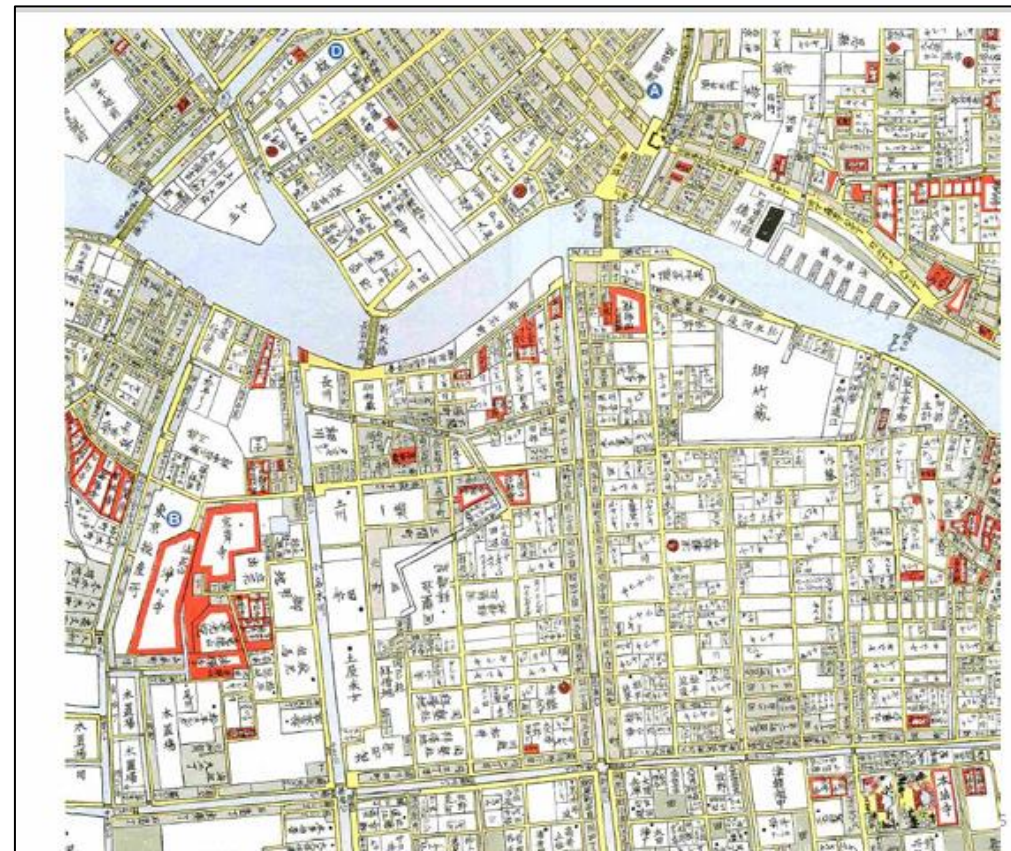
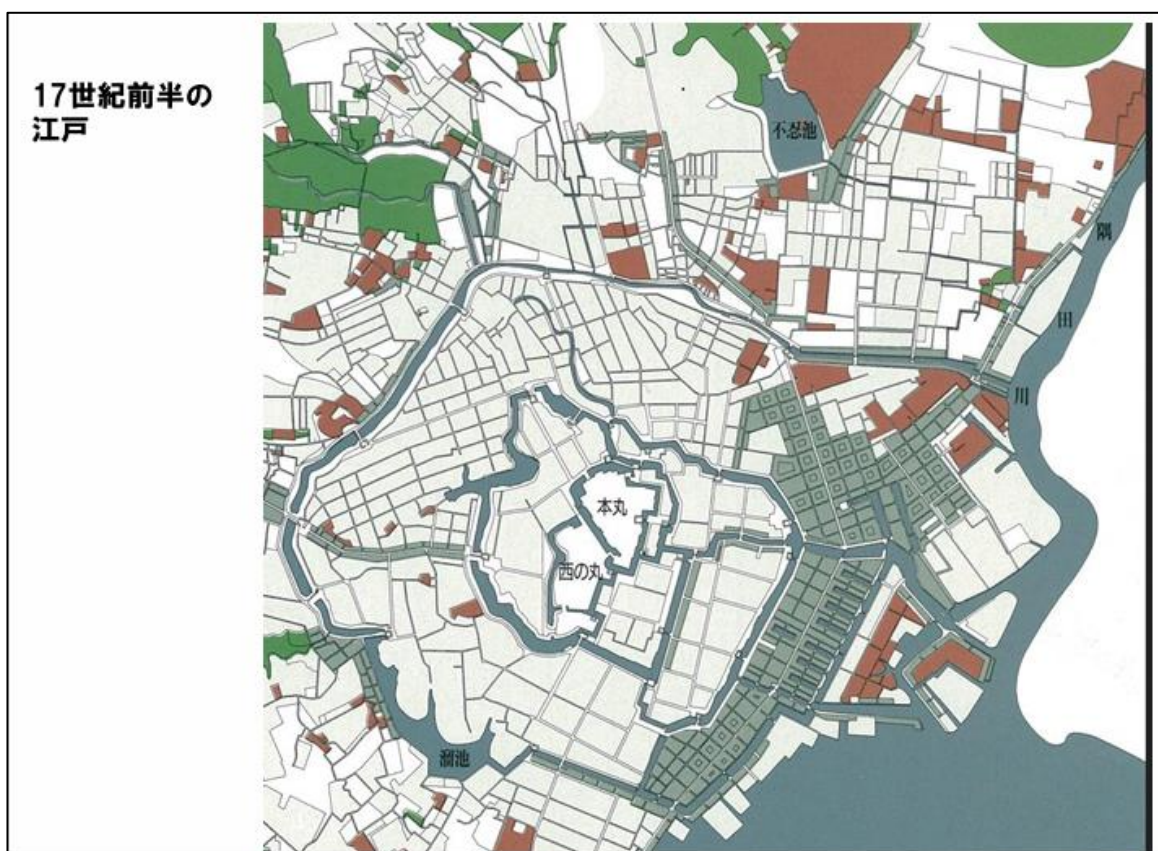
江戸の大相撲は、1624年、四谷笹寺境内での6日間の興行が最初と伝えられている。以後、勧進相撲は人だにぎわうところで開催された。その後、江戸で栄えていた、両国の回向院境内で興行されることが多かった。1833年から年に2回行われる。以降、場所直前に小屋を造り(興行が終わるとただちに崩す)による回向院場所が行われた。

江戸時代半ばに、営利のための相撲興行が定期的に許可されるようになる。年四回(東京で2回、京、大阪で一回ずつ)の本場所を開催する「大相撲」の基本的な仕組みが出来上がった。本場所は8日から10日。寺院境内などを借りて行い、屋外に屋根つきの土俵を築いての興行だったため、天気が悪いと開催できず、中断し、時には一カ月を超えることもあった。こうした大相撲の成立は、300年前になる。

12

時代		中央	地方
江戸後期	寛政	・江戸相撲が隆盛 ・1791 江戸城内上覧相撲 ・鬼面山、雷電等	・大名のお抱え力士 元禄時代 紀州、尾張など
	文化・文政から幕末	・1833年から年2回の相撲定場所は、両国(それ以前は、浅草、深川、本所、芝、神田明神等) ・不知火	・勝川派の力士似顔絵錦絵(浮世絵) ・大阪から東京へ
明治	1919年	両国・国技館	・アマチュア相撲
昭和	1931年 1937年	土俵は、13尺から15尺へ 双葉山の69連勝	・学生相撲
	1953年	蔵前国技館	
	1953年	NHKのテレビ放送 栃錦・若乃花	
	1985年	両国国技館	

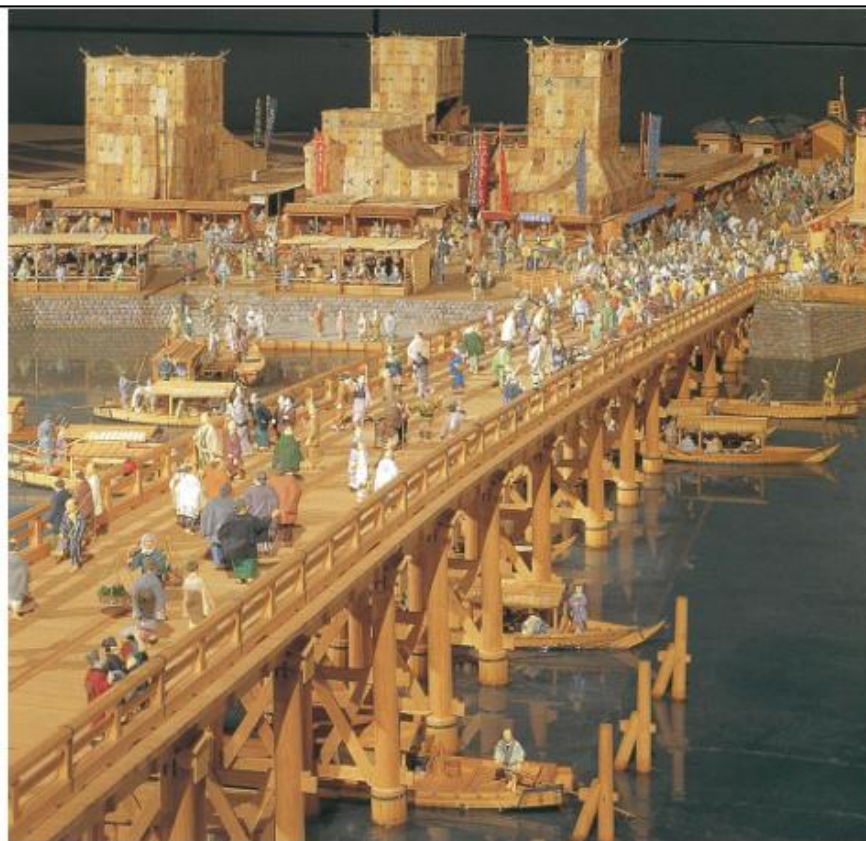




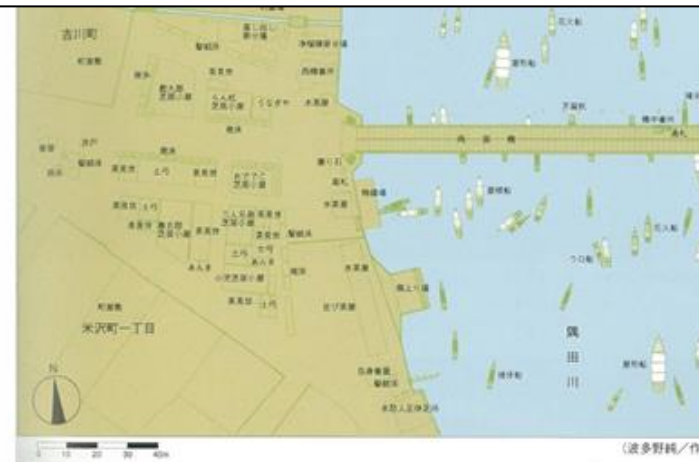




## 両国橋西詰



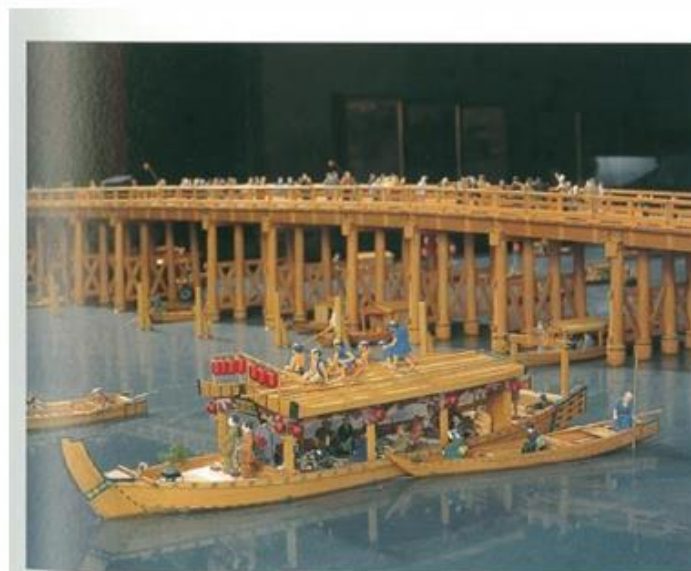
19



(波多野純/作図)

両国橋の創架年は2説あり、1659年（万治2年）[1]と1661年（寛文元年）である、千住大橋に続いて隅田川に2番目に架橋された橋。長さ94間（約170m）、幅4間（約7m）。名称は当初「大橋」と名付けられていた。しかしながら西側が武蔵国、東側が下総国[注釈1]と2つの国にまたがっていたことから俗に両国橋と呼ばれ、1693年（元禄6年）に新大橋が架橋されると正式名称となった。位置は現在よりも下流側であつたらしい。

江戸幕府は防備の面から隅田川への架橋は千住大橋以外認めてこなかった。しかし1657年（明暦3年）の明暦の大火の際に、橋が無く逃げ場を失った多くの江戸市民が火勢にのまれ、10万人に及んだと伝えられるほどの死傷者を出してしまう。事態を重く見た老中酒井忠勝らの提言により、防火・防災目的のために架橋を決断することになる。架橋後は市街地が拡大された本所・深川方面の発展に幹線道路として大きく寄与すると共に、火除地としての役割も担った。両国広小路の項も参照のこと。



屋形船「高尾丸」に接する猪牙船



西瓜・瓜などの水菓子売り

20

## 両国橋西詰

Area to the west of Ryōgoku Bridge  
(復元年代) 江戸後期  
(縮尺) 1/30

両国橋西詰の広小路には、軽業や歌舞伎芝居を見せる見世物小屋、髪結床、水茶屋などがいくつも立ち並び、寿司、てんぷら、うなぎなどの屋台、西瓜売り、朝顔売りなどの物売りや大道芸人も多く集まった。夏の間は花火見物に興じる屋形船、屋根船、猪牙船が浮かび、その間を物売りのウロ船や花火船が行きかった。この模型は、天保の改革の取締りの記録をもとにして、改革前の盛り場の姿を1500体の人形を配置して再現したものである。



提灯売り

両国橋を渡り、隅田川の東岸に位置する墨田区。「すみだ」という名称は古くから存在し、名所図会では澄みたる川という意味がその由来とされていますが、その由来は諸説あります。古くから「すみだ」「すだ」といった名称でよばれていました。

墨田区が誕生したのは昭和22年のこと。戦前の本所区、向島区が1つとなり生まれました。古来から悠々と流れる隅田川の「田」の字と、江戸時代、桜の名所として愛された墨堤の「墨」の字を取り、墨田区となりました。(東京の地名由来辞典)

### 墨田区の江戸時代

江戸時代初期の墨田区、小名木川の開削/家康が入城した当時の江戸はまず、隅田川以西のエリアを中心として開発されていきます。山手台地上の地盤がしっかりしたエリアを中心に武家地を設け、周辺に商人の町が発展していきました。

21





## 第8 回向院

明暦3(1657)年に同年正月の明暦の大火(振袖火事)の犠牲者を埋葬するため4代将軍徳川家綱の命により開基/諸宗山(しよしゅうさん)無縁寺(むえんじ)回向院(えこういん)

諸宗の別なく、有縁・無縁を問わず、更には人・動物の隔てもなく生ある全てのものに仏の慈悲を説く浄土宗寺院

両国～両国橋と回向院・両国広小路

江戸随一の盛り場として知られたのが「両国」である。その盛り場「両国」とは、本所回向院の門前町と、そへ渡る大橋(両国橋)、そして両国広小路を含んだ名称であった。現在、墨田区両国という町名があり、その近くには相撲の国技館や江戸東京博物館が存在するが、江戸時代では「本所」という地域名であった。

そもそも「両国」という地名が登場したのは、何時頃からであろうか。歴史を紐解いてみると、徳川家康が江戸幕府を開き、江戸城普請と町割りが行進して天下の総城下町ができてから半世紀ほど経った頃にあたる、明暦3年(1657)1月に江戸で大火が起こり、江戸城をはじめ市中の3分の2が焼失して多くの犠牲者がでた被災後の防災都市計画や本所・深川地域の開発の一環として、御府内側の元御蔵付近(吉川町・米沢町辺)から大川(隅田川)を挟んだ対岸の本所元町(藤代町辺)へと大橋が架けられた。この架橋については万治2年(1659)と寛文元年(1661)の2説がある。この公儀橋として100間にもわたる川幅に架けられた大橋(9間/約178m)の普請は、奉行柴山権左衛門・坪内藤右衛門の差配によって、船大工を使って行われたというが、大変難しい工事であったと想像される。この大橋を「両国橋」と称するのは、かつて武蔵国と下総国の境に隅田川が位置したことにより両国に跨がった橋という意味だと伝えるが、江戸時代に入りその境界線はもっと東の方に移動していたという。

さて明暦大火直後に、本所に建立された諸宗山無縁寺回向院は、この大火で亡くなった10万人余の無縁仏の冥福を祈るために、本所に造られた万人塚にはじまるという。それ以降、盛り場「両国」の拠点として発展した回向院境内では、諸国寺社の出開帳、見世物興行、相撲興行などで賑わい、その門前にあたる両国橋東橋詰周辺が町場化して栄えた。回向院での出開帳は、比留間尚氏によれば「166回」といい(【表】江戸における出開帳場所一覧)、まさに江戸第一の開帳数であり、2位の深川永代寺の58回と比べて桁違いに多いのである。その回向院境内では、天保4年(1832)10月より相撲興行が定場所化した。また歌川国貞画「嵯峨ノ釈尊開帳ノ図 回向院境内ノ図」(図1)では、京・嵯峨の清涼寺釈迦三尊の出開帳で大盛況の回向院、門前、そして角力や俳優の姿が、彼らを見る参詣人などで大賑わいの両国橋上を描いている。

夏の夕涼みといえは隅田川(大川)での納涼であった。江戸前期に隅田川に架かっていた橋は上流の千住大橋以外には両国橋、新大橋、永代橋のわずか三橋だけ。後期になっても吾妻橋(大川橋)がひとつ出来ただけであったので、夏には納涼の人々でどの橋もかなりの人出となった。特に両国橋の東西の橋詰の盛り場では、5月28日の川開きの日から8月28日の川仕舞いまでの3ヶ月間毎晩夜店が出た。資金を出す者さえいれば毎夜打ち上げ花火や大掛かりな仕掛け花火が行われたが、パトロンは主に両国橋近辺の船宿と料理茶屋であった。そもそも両国の花火は享保十八年(1733)の水神祭りから始まったのだが、両国橋の上流を花火師の分家「玉屋」、下流を本家の「鍵屋」が受け持って、川べりの料亭や納涼船の客の注文に応じて打ち上げた。船遊びはもっとも贅沢な遊びで、屋形船(大型の屋形を乗せたもの)や屋根(やね)船(ぶね)(日除け(ひよけ)船(ぶね)とも呼ばれる。小船に小さな屋形を乗せたもの)、さらに小さい汁溢(しるこぼ)し、伝馬(てんま)、荷(に)足(たり)、猪(ちょ)牙(き)船(ぶね)などの涼み船が数百隻も隅田川に漕ぎ出した。うろうろ船はこれらの涼み船の間を縫うように漕ぎながら小料理、天麩羅、鮓、果物、酒などを提供し、また流(なが)し船(ぶね)は新内(しんない)、清元(きよもと)節、富本(とみもと)節、常磐津(とこわす)節(いずれも江戸(えど)豊後(ぶんご)浄瑠璃)一中(いちゅう)節(古曲)などを提供したのである。納涼の時期と同様に、花見の頃にも隅田川の川面は屋形船、屋根船でいっぱいになったという。

## \* 明治以降の両国橋

明治30年(1897)の両国花火大会では両国橋に詰めかけた見物人の重みで欄干が崩れ、結果数十人の犠牲者が出た。これを機に明治37年(1904)に鋼製トラス橋が架設された。(トラスとは、橋げた部分を三角形に繰り返して造る構造のこと)現在の両国橋は関東大震災復興橋梁として昭和7年(1932)に架設された鋼製の桁(けた)橋(ばし)(横にかけた桁によって橋面を支えるもので、橋を支えるために特別な形状を用いない橋)で、江戸時代の両国橋よりやや北に架かっており、京葉道路と繋がっている。橋桁部分は大きな曲線を描いており、橋の上のバルコニーや欄干には相撲をモチーフにした装飾が施されている。橋の東側袂(たもと)には、享保三年(1718)創業の山くじら(猪肉)料理の専門店「もんじや」がある。

出開帳とは、... 全国の有名なお寺の本尊を出張させて拝ませるもの出張して来るお寺側は、出開帳で得られるお賽銭や寄進をお寺の修復費用にあてる回向院(境内を貸出す側)は、土地の賃賃料が収入となるかかる費用は大きなお寺(成田山新勝寺くらいの規模)で大体300両(現在の3,000万円)、その他に境内使用料としての土地代が40両(400万)程度必要だった元々お寺の修復費用を得るための出開帳で、これほど多額の出費をしても大丈夫なのか?

(出費に見合う収益が得られる寺院で出開帳を行うことが大切)

江戸一番の繁華街・両国橋の袂と言う抜群のロケーションにあった回向院に人気が集

結果、江戸で行われた出開帳の実に1/4にあたる166回が回向院で開催された

(回向院の出開帳では出費のおよそ10倍の収益が見込めた)

## 勧進相撲

勧進とは、... 寺社の建立・修復などのために費用の喜捨を募ること

勧進相撲が最初に行われたのは、室町時代の応永26(1419)年に伏見法安寺造営のときと言われる

回向院で勧進相撲が行われ始めたのは明和5(1768)年9月から。

この年に勧進相撲の定場所とされるが、当時はまだ深川八幡など他の場所で行われる方が多かった。東両国が発展するにつれて回向院での興行回数も増えてくる。

もともと勧進相撲は「興行で得た木戸銭を神社仏閣の建立や修繕費に当てる」と言うのが本来の目的であったが、文化・文政時代(1804~1830)には、力士自身の生活のために行う営利的な興行への変化が見られる(興行には寺社奉行の許可が必要のため「勧進相撲」の名は引き続き使用)。

また当時の強豪力士の殆どは大名のお抱え力士であったので、藩の誇りがかかった武芸の1つと考えられていた側面も。

回向院が名実ともに勧進相撲の定場所となるのは天保4(1833)年の10月場所から。

毎年2回(春秋)、晴天10日間の定場所興行となり、以後明治42(1909)年に常設館が建設されるまでの76年間、小屋掛けによる回向院場所が続く。

常設館(開館当初は「両国元町常設館」、翌年から「国技館」として定着)は回向院の境内に建設されたが、その建設費は28万円(現在の価値では約75億円に相当)、ドーム型屋根の洋風建築で収容人数は1万3千人であった。

## 1800年代に流行したもの

- 1 伊勢参り、富士講
- 2 歌舞伎
- 3 相撲
- 4 浮世絵
- 5 商人・豪農
- 6 稲荷信仰
- 7 黄表紙
- 8 寺子屋
- 9 新興宗教

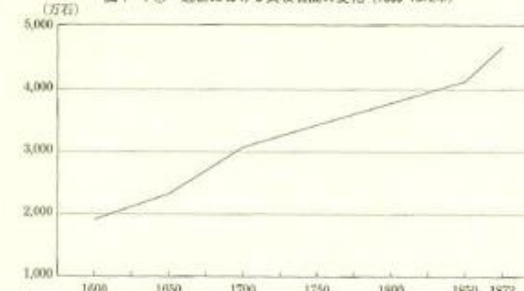
石高制は江戸幕府にも受け継がれ、以後、明治初期の地租改正にいたるまで年貢の賦課基準として使われることになった。新たに土地が開拓されたところでは、追加的な検地がおこなわれたので、石高の量は時代とともに増加することになる。しかし、従来からある田畑に関しては、たとえ生産性の向上があったとしても近世中期以降、検地のやり直しはほとんどなかった<sup>4)</sup>。こうした再検地は課税基準の上昇を意味したので、農民の抵抗が強かったためである。したがって、もし、農業生産性の向上があったとすれば、石高は徐々に実際の農業生産量から離れていく性質を持っていたと考えられる。

表1-1 江戸時代のマクロ経済指標

時期	石高 (万石)	実収石高 (万石)	人口 (万人)	耕地 (万町)
1600年頃	1,851 (1600年)	1,037 (1600年)	1,500 (1600年)	207 (1600年)
1650年頃	2,313 (1645年)	2,313 (1645年)	1,770 (1650年)	
1700年頃	2,580 (1697年)	2,580 (1697年)	2,128 (1721年)	
1750年頃	2,970 (1716~48年)		2,101 (1750年)	297 (1730年頃)
1800年頃	3,043 (1830~32年)	3,076 (1830年)	2,248 (1814年)	
1850年頃	3,220 (1857年)	4,081 (1857年)	2,481 (1872年)	353 (1873年)

出典：速木・宮本(1988: 44)、および東原(2007: 76)による。かつこ内は調査年。1800年頃の人口に関しては本文を参照。

図1-1 ① 近世における実収石高の変化(1600-1872年)







興行場所	1753～1780		1781～1800		1801～1833		合計	
	宝暦3.10～安永9.10		天明元.3～寛政12.10		享和元.3～天保4.2			
	回数	%	回数	%	回数	%	回数	%
深川八幡	23	53.5	5	13.2	1	1.6	29	20.0
御蔵前八幡	5	11.6	12	31.6	4	6.2	21	14.4
芝神明	4	9.3	2	5.3	4	6.2	10	6.9
神田明神	1	2.3	1	2.6	2	3.1	4	2.7
本所回向院	2	4.7	17	44.7	40	62.5	59	40.7
市ヶ谷八幡	1	2.3					1	0.7
西久保八幡	1	2.3			2	3.1	3	2.1
市ヶ谷長龍寺	1	2.3	1	2.6			2	1.4
深川三十三間堂	2	4.7					2	1.4
本所一ツ目御旅所	2	4.7					2	1.4
深川御船蔵前御旅所	1	2.3					1	0.7
茅場町薬師					6	9.3	6	4.1
深川元町神明社					1	1.6	1	0.7
浅草観世音					1	1.6	1	0.7
麴町七丁目心法寺					1	1.6	1	0.7
御蔵前大護院					1	1.6	1	0.7
湯島天神					1	1.6	1	0.7
合計	43回	100%	38回	100%	64回	100%	145回	100%

勧進相撲の興行場所と回数一覧(酒井忠正『日本相撲史上巻』より作成)  
(竹内誠「両国盛り場論」(江戸博調査報告書第24集「両国地域の歴史と文化」)所収)

30

## すみだ北斎美術館



すみだが生んだ世界の画人 「葛飾北斎」

墨田区は長い歴史をもち、東京23区のなかでも、特に古い行事や伝統技術を残している区のひとつです。こうした歴史を誇る「すみだ」は、政治家、思想家、宗教家、文筆家や芸術家など、さまざまな活躍をした偉人を多数輩出しています。

浮世絵師の葛飾北斎(1760年から1849年まで)も、そうした偉人のひとりですが、その魅力的な生涯や、およそ70年にもわたって描き続けられた多彩な作品は、没後約160年経た今日、ますます高い評価を得て、世界の偉大な芸術家として広く注目されています。実は、この北斎は墨田区に生まれ、その90年にも及ぶ長い生涯のうち、90回以上も引越をしたといわれますが、そのほとんどを「すみだ」で過ごし、多くの名作を残しました。作品の中には、両国橋や三囲神社、牛嶋神社など、当時の「すみだ」の景色を描いたものが数多くあります。

なお、葛飾北斎の「葛飾」は、出生地である「すみだ」を含む地域が、武蔵国葛飾郡であったことから名乗ったといわれます。

31

北斎の絵はすでに生前から外国で知られていて、例えばオランダ商館の医師として来日したフィリップ・フランツ・フォン・シーボルト(1796年から1866年まで)が、1832年から1851年までにかけて出版した自著『Nippon』の挿図に『北斎漫画』の図柄を用いています。しかしながら、その名がより広範に知れ渡ったのは、1867年のパリ万国博覧会を皮切りにジャポニスム(日本趣味)が起こってからです。この博覧会で数多くの美術工芸品とともに浮世絵が紹介され、その大胆な構図や明るい色彩は、従来のヨーロッパの絵画にはなかったものであり、ヨーロッパの芸術家たちに大きな影響を与え、印象派誕生のきっかけとなっています。

北斎に影響を受けた画家には、ビンセント・ヴァン・ゴッホ(1853年から1890年まで)やエドガー・ドガ(1834年から1917年まで)などがいて、ドガは『北斎漫画』を参考にした人物像を描いています。また、アンリ・リヴィエール(1864年から1951年まで)は、「富嶽三十六景」を下敷きに「エッフェル塔三十六景」という版画シリーズを制作し、アール・ヌーヴォーを代表するガラス工芸家のエミール・ガレ(1846年から1904年まで)は、『北斎漫画』の鯉を図案に取り入れた花瓶を世に送り出しています。音楽家のクロード・ドビュッシー(1862年から1918年まで)も「富嶽三十六景 神奈川沖浪裏」に発想を得て、交響詩「海」を作曲したとされています。

このようにヨーロッパの芸術家に大きな影響を与えた北斎は、世界における評価が高く、1960年には、ウィーンで開催された世界平和評議会の席上において、世界の文化巨匠として顕彰され、また1998年には、アメリカの有名なフォトジャーナル誌『LIFE』が発表した『ザ ライフ ミレニアム』の「この1000年で最も重要な功績を残した世界の人物100人」の中で、日本人で唯一北斎が選ばれています。

32

## 豊富な画風と画想

約70年間の画業で、数多くの作品を残した北斎ですが、一見すると、ひとりの絵師が描いたとは思えないほど画風の違いがみられます。19歳で勝川春章の門に入り、春朗[しゅんろう]と号した北斎は、すでに春朗期の終わり頃から、浮世絵だけでなく、狩野派、土佐派、西洋画法など、さまざまな種類の絵画を学んでいたといわれています。その後、勝川派とはまったく異なる、琳派という装飾画様式の一門である宗理派を学び、俵屋宗理[たわらやそうり]を襲名しました。この宗理派も離れた後は、天地、宇宙、自然を自分の師と仰ぎ、作画を続けていくことになります。このような経緯・経験が、北斎の多彩な画風を生んだと考えられます。

北斎の豊富な画想も様々な作品で発揮されています。東海道や木曾街道といった東西に長い街道を一枚の図に収めるため、街道を迷路のようにくねらせて構成しています。読本挿絵では、大胆な画面構成と墨の濃淡だけで読本の内容を臨場感あふれるように表現し、この分野の第一人者になります。絵手本の分野でも、従来の単なる絵の手本ではない、工芸職人が実際に利用できるような工夫を施しました。

版本のページを数ページつなげて高い塔を描き、限られた紙面での新しい表現の可能性を提示、また大砲を打つと次ページで的に命中するといった、アニメーションのような連続性を持たせたページ構成も試んでいます。

代表作「富嶽三十六景」シリーズをはじめとする晩年の錦絵作品では、単に景観や人々の生活を描写するのではなく、ひとつの対象物にどのくらいの見かたがあり、どう変化をみせるのかに注目しています。

33





## 北斎の生涯と言葉

北斎の人柄や考え方に関して、絵手本の序文や跋文〔ばつぶん〕、書状、川柳などの北斎の言葉から、その一端をうかがうことができます。

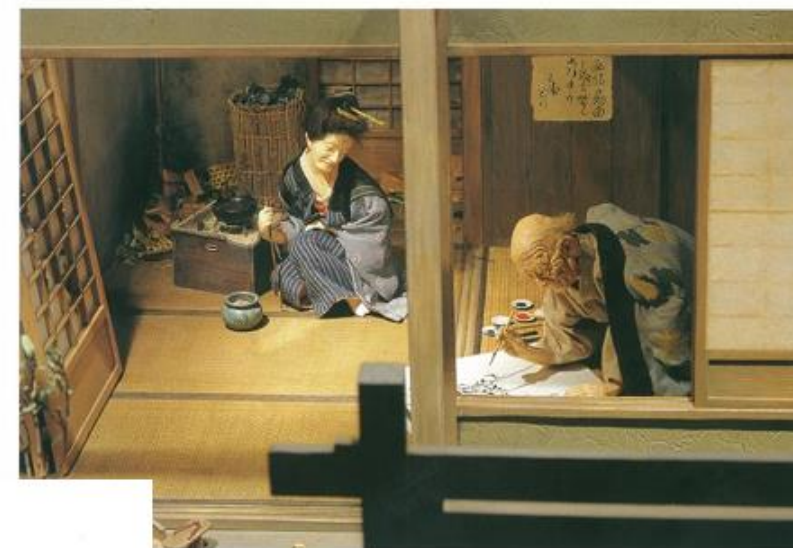
特に有名なものは、北斎が75歳の時に出版された絵手本『富嶽百景』初編の最後にある跋文です。6歳の頃から絵を描いてきた北斎は、70歳以前までに描いた絵は取るに足らないもので、73歳にしてようやく動植物の骨格や出生を悟ることができたと言っています。そして、80歳ではさらに成長し、90歳で絵の奥意を極め、100歳で神妙の域に到達し、百何十歳になれば一点一画が生きているようになるだろうと、100歳を超えてもなお絵師として向上しようとする気概を語っています。

北斎は鳥羽絵などの戯画も描いてユーモアを発揮していますが、川柳も詠んでいます。川柳の句集『俳風柳多留 [はいふうやなぎだる]』には、文化6年(1809年)頃から祀、万字などと号した北斎の句が載っています。たとえば「蜻蛉は石の地藏の髪を結び」と、トンボが地藏の頭にとまった情景が描く[まげ]を結っているようにみえることと酒落ています。また、北斎が版元に宛てた借金の証文では、自分を「へくさい」とか「尻クサイ」と、へりくだっておどけた表現で呼んでいます。

死の直前、北斎は、「天我[てんわれ]」をして五年の命を保たしめば、真正の画工となるを得べし」と言ったといわれます。辞世の句は「ひと魂でゆく気散[きさん]じや夏[なつ]の原」です。絵師の道を追求し続けた北斎が、死んだ後は人魂[ひとたま]となって夏の草原をのびのびと飛んでゆこうと詠んでいます。

34

葛飾北斎



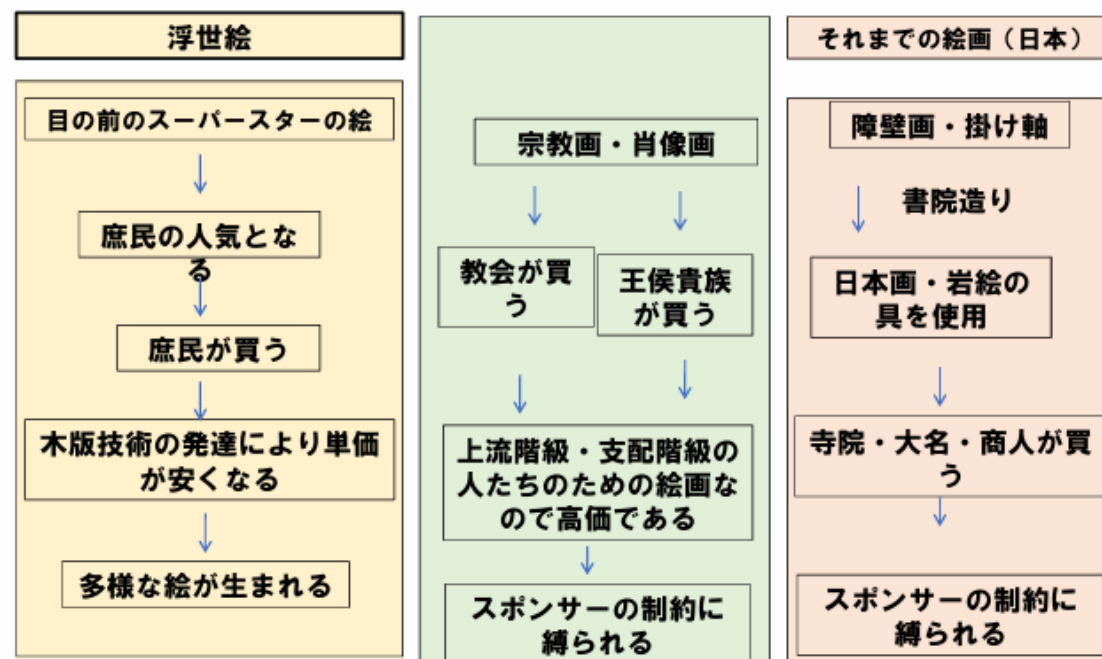
北斎の画室

Model of Hokusai's studio  
(復元年代) 1842年(天保13)ころ  
(縮尺) 1/5

京都府京都市東山区の「北斎翁の故宅」(現・北斎翁の故宅)は、北斎の生誕地とされている。北斎の生誕地は、京都府京都市東山区の「北斎翁の故宅」(現・北斎翁の故宅)とされている。北斎の生誕地は、京都府京都市東山区の「北斎翁の故宅」(現・北斎翁の故宅)とされている。

35

## 美術史の大きな変換



国立博物館・長谷川等伯

37





岩絵の具

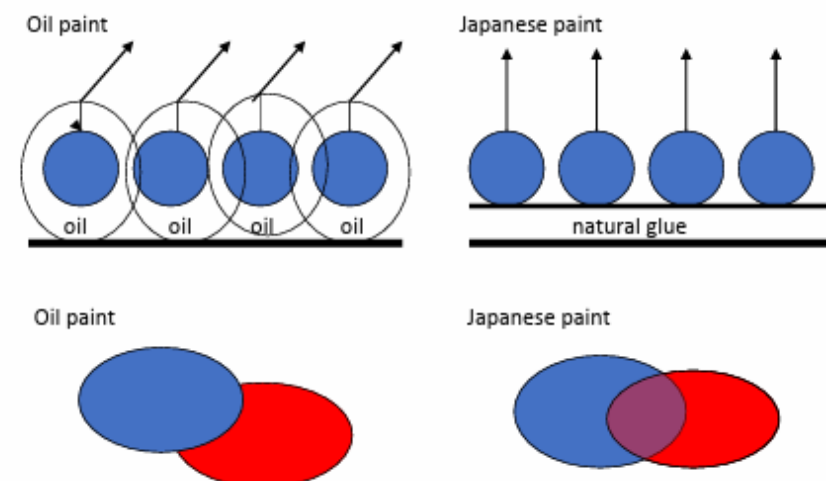
Materials for Japanese painting <Natural paints made of minerals>



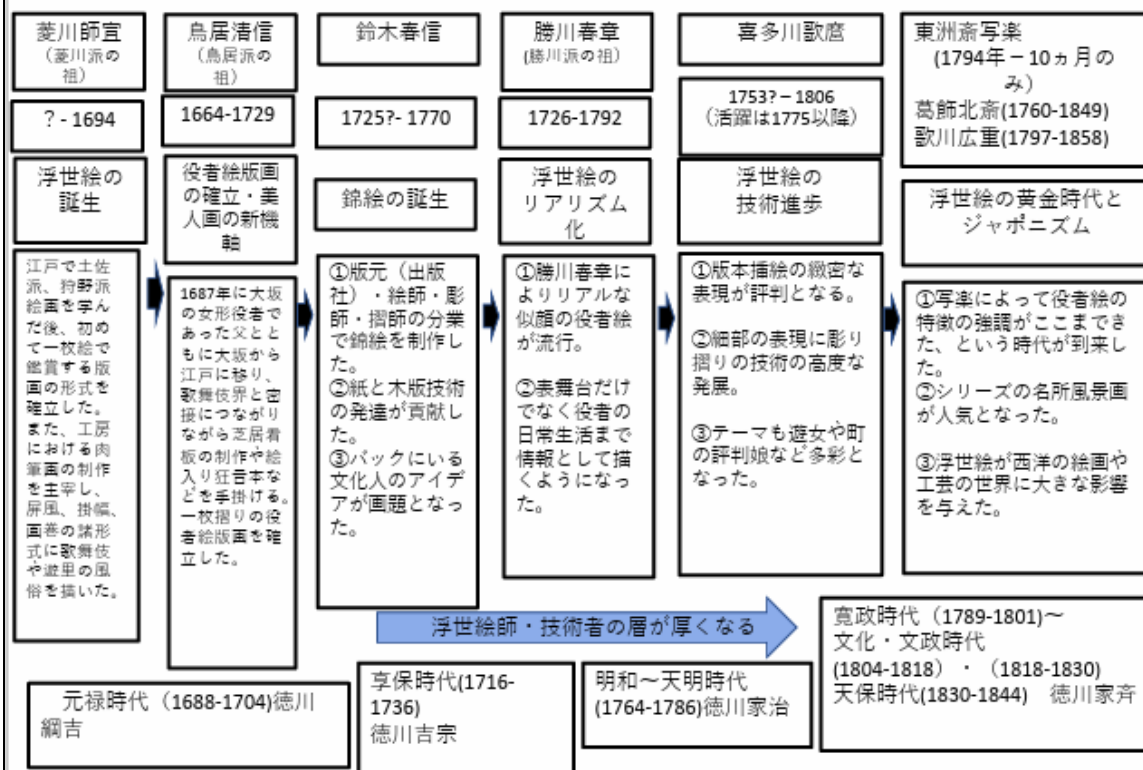
Mineral stones were crushed into small particles and mixed with natural glue taken from collagen of animals.



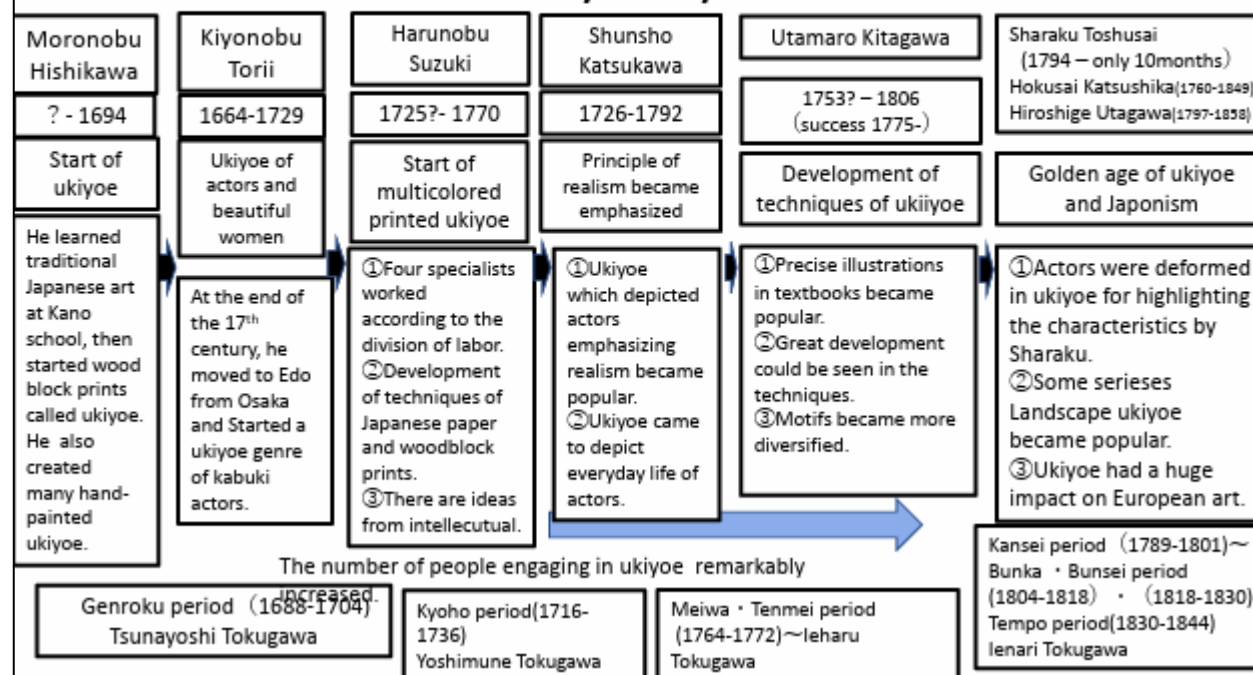
Difference between Japanese paint and oil paint



浮世絵の誕生から黄金時代への流れ



History of Ukiyoe







錦絵  
鈴木春信

肉筆画



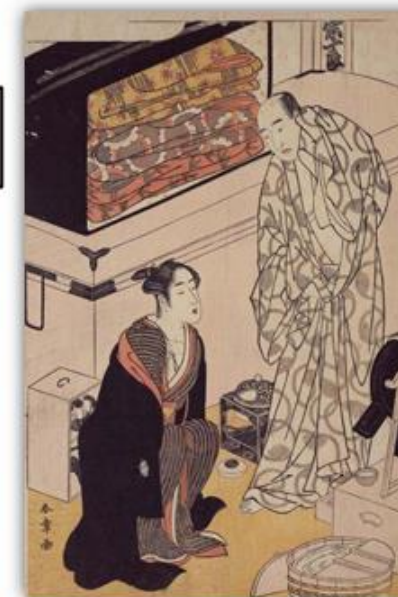
春信画《雪中相合傘》  
明和4年（1767）頃  
大英博物館

勝川春章（勝川派の祖）1726-1792  
浮世絵の真写主義（リアリズム）

- ①勝川春章によりリアルな面貌描写をした役者絵が流行
- ②表舞台だけでなく役者の日常生活まで情報として描くようになった



勝川春章画《小野川三郎・谷風観之助・行司木村庄之助》大々判 天明～寛政期 千葉市美術館



勝川春章画《楽屋内 沢村宗十郎》  
大判錦絵 東京国立博物館

喜多川歌麿  
1753? -  
1806

（活躍は1775以降）

木版技術の  
進歩

- ①版本挿絵の緻密な彫り摺りの表現が評判となる。



喜多川歌麿画『面本虫撰』江戸東京博物館

喜多川歌麿

- ②細部の表現に彫り摺りの技術の高度な発達

→美人画における髪の毛や眉・目・鼻・口などの表現が豊かになる。

- ③美人画のテーマも遊女のほか評判娘や町家の女性など多彩となる



歌麿画《當時三美人》富本重信・菊池屋きた・高しまひさ 雲母摺大判錦絵  
寫真板  
オーストン美術館





ぼかし摺り技術の発展



広重画 東海道五十三次 蒲原



東洲斎写楽

(1794年 - 10ヵ月のみ作成)

- ・リアリティからの飛躍
- ・写実を超えた個性の強調、デフォルメ
- ・西洋の近代絵画に先行する表現

東洲斎写楽画  
四代目松本幸四郎の山谷の  
有屋五郎兵衛  
大判錦絵・黒雲母  
鳥屋重三郎板  
「極」印  
江戸東京博物館  
＊寛政6年（1794）5月桐  
座「勘次郎合話」



東洲斎写楽画 四代目岩井半四郎の重の井  
大判錦絵・黒雲母 鳥屋重三郎板  
「極」印 大英博物館 ＊寛政6年（1794）5月  
河原崎屋「恋女両面分手綱・義経千本桜」

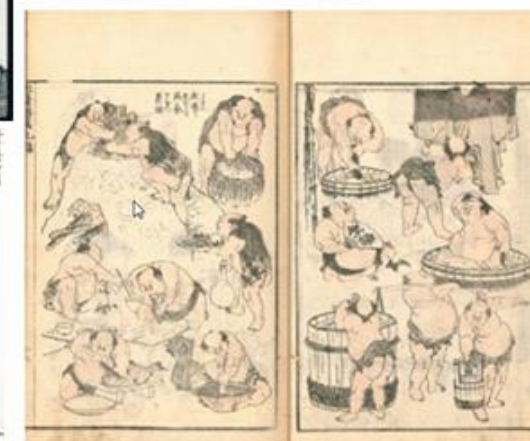
葛飾北斎(1760-1849)

Berlin blue



北斎改为一筆 富士三十六景 凱風快晴（赤富士）  
Early morning clouds in the huge beautiful sky provide a perfect background for the majesty of holy Mt. Fuji. His spiritual power made him express the magnificent view with only three main colors.

墨田北斎美術館 葛飾北斎『北斎漫画』19世紀



In the 19<sup>th</sup> century, Hokusai poured his energy into illustrating books. His fantastic pictures created a style of graphic novels, which lead to today's popular manga, comics.





## 刀剣博物館



### 建築について

敷地は池泉回遊式の庭園が残る旧安田庭園の一角にあり、このような立地を活かし、庭園散策や地域の展示空間、名所旧跡と連携する庭園博物館として計画されました。博物館はこれまで建っていた旧両国会堂の佇まいを継承し、池に向かって張り出した円筒部とその両側の翼部から構成されています。また公会堂のドームに変わり、頂部にはヴォールト屋根が架けられ、高さを抑えて庭園との調和を図っています。

敷地面積 2157.9 m<sup>2</sup>/建築面積 1076.9m<sup>2</sup>/延床面積 2619.8m<sup>2</sup>/高さ 15.6m

設計  
横総合計画事務所



1928年東京都に生まれる。1952年に東京大学工学部建築学科を卒業し、アメリカのクランブルック美術学院及びハーバード大学大学院の修士課程を修了。ワシントン大学とハーバード大学で都市デザインの準教授も務める。1965年に帰国、株式会社横総合計画事務所を設立。  
横文彦は国内外で数々の賞に輝くなど高い評価を得ている。主な受賞歴は、1988年にイスラエルのウルフ基金賞受賞、1990年にトーマス・ジェファーソン建築賞受賞、1993年に国際建築家連合(UIA)ゴールドメダルとハーバード大学から贈られるプリンス・オブ・ウェールズ都市デザイン賞受賞、1999年にアーノルド・ブルナー記念建築賞と高松宮殿下記念世界文化賞建築部門受賞。  
多数ある受賞の中でも、最も建築家にとって名誉あるプリツカー賞を1993年に受賞し、2011年にはAIAアメリカ建築家協会から贈られるゴールドメダルも受賞。

### 刀剣博物館について

刀剣博物館は日本刀を保存・公開し、日本刀文化の普及のため、日本美術刀剣保存協会の付属施設として昭和43年に開館しました。

日本刀は古来武器という性質以外に、信仰の対象や権威の象徴としての側面をもち、また美術品として鑑賞の対象にもなっていました。廃刀令後本来の日本刀の役割を終え、更に第二次世界大戦後、日本刀は武器と見なされ駐留軍による没収的となり壊滅の危機に瀕しました。しかしながら本間順治、佐藤貫一氏等の活動により戦後の混乱を脱し、両氏を中心として昭和23年に美術工芸品としての日本刀の保存・鑑賞・研究・伝統継承のため日本美術刀剣保存協会が設立されました。

日本刀は日本人の豊かな感性により武器が美術工芸品にまで昇華されたといわれる文化財で、千年を越えて大切に保存され、歴史的・文化的にもその果たした役割が大きいと言えます。日本刀に美を感じることは、日本の文化を感じることはないでしょうか。いまなお製作当時の姿を伝え、燦然と輝いている日本刀は、国内のみならず海外からも非常に高い関心が寄せられています。  
当館は刀剣類、刀装、刀装具、甲冑、金工資料、古伝書等を多数所蔵し、その中には国宝の太刀 銘 延吉や国行(来)、国行(当麻)、重要文化財 太刀 銘 信房、重要美術品 太刀 銘 真景など、国の指定・認定物件も数多く含まれています。



51

### 馬上戦に適した太刀は反りが深い

太刀は、刀身の長さにかかわらず反りが深いことが特徴的です。太刀の姿が完成された平安時代後期は武士が台頭し始めた時期にあたり、戦の中心は馬に乗って戦う1対1の馬上戦でした。

この平安時代後期から鎌倉時代前期にかけて盛んに用いられた太刀は、反りの中心が手元に近い部分で最も強くなる「腰反り」(こしぞり)。

そして鋒/切先へ向かうにしたがって反りはほとんどなくなり直線的になっています。

こうした形状は、騎馬で抜刀しやすく、また馬上からの突刺(しとつ:突き刺すこと)にも適していました。



馬上戦と太刀

さらに、反りの深い太刀は馬上で腰に佩いたときに鞘の先端である「鞘尻」(こやしじり:「石突」[いしづき]とも)が上を向くため、誤って馬のお尻を叩いてしまうことがないのです。

鎌倉時代中期以降、「歌古楽来」(もうこしやうらい)または「光寛」(げんこう)とも呼ばれる1274年(文永11年)の「文永の役」(ぶんえいのえき)と1281年(弘安4年)の「弘安の役」(こうあんのえき)をきっかけとして武士の戦い方にも変化が起こります。1対1の馬上戦から、集団での戦いを余儀なくされ、太刀はより果敢を重視した形状へと変化。身幅(みはば)はいっそう広く、重ね(かさね)も厚くなり、反りも刀身の中ほどに中心がある「中反り」(なかぞり)となり、甲冑をも断ち切る強靭さを備えることとなりました。

### 反りが浅く、扱いやすい打刀

さらに時代が下り、戦国時代に入ると戦はより大規模になり、馬上戦よりも地上で戦う徒歩戦が主流になりました。大勢が至近距離で戦う徒歩戦では、反りが強く長寸な太刀は扱いにくく効果的とは言えません。そこで、太刀に代わって日本刀の主流となったのが、反りが浅く比較的軽量の打刀です。

刃側を上に向けて腰に差す打刀は、小さな動作で素早く騎から抜くことができ、集団での接近戦に向いていました。並み居る武将達が天下を目指した群雄割拠の時代には、打刀は大量に作刀されることとなったのです。

出典 : 刀剣ワールドHP





## 1. What was a samurai?

- I'm going to start today right at the beginning with being clear what a samurai was and how he fought. The reason is that both Japanese and foreigners have many misconceptions not only about what samurai really were and a very romantic view as to how they fought and how battles were conducted. We mainly owe Hollywood and the Japanese film industry for this, but the misconceptions go right back to the Edo period and the popular romantic novels of the time. So in this lecture we are going to start in around the 10<sup>th</sup> century and progress from there.
- In the centuries AD 900 to 1600, the definition of the word 'samurai' changed considerably.
- Warriors who fought during the Gempei War (1180–85) for example would probably have been puzzled, not to say offended, if anyone referred to him as a samurai. The reason was simply that the word was derived from a verb meaning 'to serve' and had once denoted a domestic servant, and also if we go back to the 12th century, the title had not yet acquired the specifically military meaning it has today.
- The truth was that until the early 15th century the word 'samurai' still retained the implication of subservience to someone else. Warriors called samurai who fought during the Gempei War were actually the followers of an elite class who owned lands and had important family connections. Those leaders rode horses and were skilled archers.
- During the 13th century such upper-class individuals became known as gokenin ('honourable houseman'), whose elite status derived not only from their skills at warfare but also from their ownership of the patches of land granted by the shōgun and from which they took their surnames.

- Gokenin expected loyalty from the non-landowning samurai who followed them into battle and fought on foot, sometimes with bows but normally with edged weapons. It is this group – often mistakenly referred to only as foot soldiers – who were the actual 'samurai' at that time. The major distinction from the previous Heian period is that you now didn't have to be born into a good family to get somewhere in life. Being a samurai meant that you were able to rise in society because of good service and the rewards that followed, so their status was slightly closer to the European squires or attendants who served noble knights, many of whom became knights themselves.
- When we come into the Sengoku Period, which was an age of strife but also one of opportunity when power, status, and wealth were all up for grabs. As titles and even pedigrees became meaningless the word 'samurai' acquired a new and wider significance that took in both the former Gokenin leaders as well as their followers and what you have now is a kind of unified military class called samurai consisting of well-off old families of samurai and those that had fought their way up to being granted the rank.
- With the emergence of a time of established peace under the Tokugawa family, who consolidated their rule from the 17<sup>th</sup> century onwards, the word 'samurai' achieved its definitive meaning as a fighting man whose duties were totally separate from carrying out any other sort of activity such as farming or trade.
- Tom and his friends in the Japanese film industry are largely responsible for a lot of the nonsense we commonly believe today not only about what samurai were and did, but also a lot of nonsense about so-called Bushido that we think they believed.

## 2. What did a Samurai look like and why?

- We can get a very large clue as to what samurai were and how they really fought by simply examining what they looked like and how they dressed when they went into battle, because the armor they wore was very specific to the way they actually fought, as it was specifically designed for that purpose.
- By the twelfth century, the samurai wore armor of a characteristic design. It was made from small scales tied together and lacquered, then combined into armor plates by binding them together with silk or leather cords.
- Now, if you only made a suit of armor from iron scales only, it would have been super heavy, so a mixture of iron and leather scales were used, with the iron bits covering the more vulnerable areas of the samurai's body.
- This classic "samurai armor" was therefore of armor made from small plates fastened together, which was the traditional defensive armor of Asia, not just Japan, and totally different from the heavy plate and mail of European knights.
- The standard suit of armor of the classical samurai of the Gempei War was known as the *yoroi*, and the body of the armor, the *dō*, was divided into four parts, giving the *yoroi* a characteristic boxlike appearance.
- Two large shoulder plates, the *sode*, were fastened at the rear of the armor by a large ornamental bow called the *agemaki*. The *agemaki* allowed the arms fairly free movement while keeping the body always covered because the samurai did not use shields.

- The shoulder straps and guards on them were designed to stop a bowstring from catching on any projection.
- No armor was worn on the right arm, to leave the arm free for drawing the bow, but a *kote*, a simple bag like sleeve with sewn-on plates, was worn on the left. You can see this clearly here in the slide.
- The whole point of the *yoroi* style armor, and its whole design had one thing in mind. It was not to make it easier to use a sword – the overriding purpose was to provide the maximum protection for a man who was a mounted archer.
- So, if you look at Tom here, this sort of thing, charging into battle waving a *katana*, almost NEVER happened. That was not what samurai were, and their armor was never designed for that kind of weapon.
- The reason for the *yoroi-gumi* style of combat was largely the samurai's primary role as a mounted archer. It is built for a guy riding a horse and using a bow, not for a swordsman.
- While mounted and wearing a suit of armor like this, built like a rigid box, he was effectively a mobile "gun platform." Let me just show you what a gun platform looks like:
- When he was unable to use his bow, he could only fight and grapple in the most clumsy fashion. His armor, although not so heavy, was not designed to allow him to take the fight to the enemy, and was certainly not helpful in allowing a sword to be used from the saddle.
- And when we think about the *tachi*, we have to remember that this was a two-handed weapon, so to use it, the samurai would have to discard his bow, and that meant that his opponent had the advantage.
- This role as a mounted archer, which was much more prestigious of course than fighting on foot, was so important that the samurai referred to their calling as *kyōba no michi*, or "the way of horse and bow," NOT the "way of the sword". And this, if you are guides teaching people about samurai, will come as a complete surprise to any foreigner and probably a lot of Japanese that you encounter.

- On the whole traditional Japanese armour provided a good defence but it contained a number of weak points that changed little over the centuries.
- This armor changed over time of course, and got heavier as new more dangerous weapons were introduced, such as guns. There were obvious gaps between the sections particularly around the face. There were also parts of the body that were not covered by anything made of metal or leather, such as the backs of the legs and the insides of the arms and the areas defended only by mail or cloth or plate.
- Bear in mind what the armor was up against in battle, and you can see that it was actually pretty effective mostly. The thing you had to worry about most, was the fact that the other guys had bows. You might be able to protect yourself due to your sword skills on the ground, but with an arrow heading towards you, that was a different matter.
- Luckily for you, the maximum effective range of an early Japanese arrow was unlikely to be more than about 20 meters, and the preferred distance for inflicting a wound or killing an opponent by hitting a weak spot or finding a gap in his armor was little more than 10 meters. If you could stay at a distance, riding around and shooting at the enemy, you had a higher chance of surviving as well as doing considerable damage.
- If you hit someone like directly between the eyes, you could of course kill them, but this was pretty rare. So it was more common for the samurai to die after sustaining multiple arrow wounds. For example, it took 20 arrows to kill one Imagawa Yorikumi, who served in the Nambokucho wars.



## 3. The Way of Horse and Bow

- Samurai battles began with the bow, and usually ended with it.
- Accounts of sword fighting between samurai, or even hand-to-hand grappling with dagger or bare hands, are quite clearly descriptions of what happened at the end of an encounter if, and only if, the mounted samurai had lost the use of his bow, or horse, or both. Otherwise, a fight between mounted samurai would be decided by bow and arrow, at which they were extremely skilled.
- Here's a good story I found which illustrates a warriors attitude to the bow vs the sword.
- This passage in *Konjaku Monogatari* provides the most surprising anecdote for anyone brought up with the tradition of the invincible samurai swordsman.
- One night, robbers attacked a certain Tachibana Norimitsu while he was on his way to visit a female acquaintance. He was armed only with a sword. As the robbers encircled him, Norimitsu crouched down and looked around, but as he could only see men with swords, he commented with relief, "At least I didn't see a bow."
- He did in fact vanquish the robbers, but his evident relief that he was not up against anyone armed with a bow is very telling. Common sense, after all, states that a bow gave a skilled archer (as all samurai were trained to be) a considerable advantage over a swordsman, who could be shot or injured long before he came within striking distance.
- This being said, and despite the fact that there are many heroic instances of mounted archery by skilled individuals which are to be found throughout the early *gimkimonos*, shooting an arrow from a galloping horse with any degree of accuracy while wearing the heavy *oyoroi* type of armor must have been much more difficult than is suggested by its modern equivalent the martial art of *yabusame*.

- One of the archer's biggest problems of course was his horse, and this was because of the horse's head, he could only shoot well to his left side along an arc of about 45 degrees.

This brings us to how the bow was used.

- The mounted archer holds his bow high above the horse's head and then brings it down, moving his hands apart in the draw as he does so. When his left arm is straight at his right hand is near the right ear the bowstring is released. The bow would then rotate in his left hand as he delivers the arrow.
- When the mounted archer was finished with his bow, this was when it would be slung around his shoulders or hung from the scabbard before other weapons were used. Alternatively, the bow could be handed to an attendant.
- There is also a general misconception as to how battles were fought on the whole. If your best shot at killing the enemy was to use the bow, and most people actually died of arrow wounds, it was better if the enemy didn't see you coming. This is kind of the opposite thing we see in the movies, where two sides line up and you know what is going on.
- Contrary to the popular image of battles beginning with single combat, many conflicts of the early period started with surprise attacks or night raids to catch the enemy off guard so that the deadly arrows seemingly came from nowhere. This may not seem very polite or chivalrous, but, as someone in France once said, 'C'est la guerre,' that's war.
- During these night raids, and also sieges, fire arrows or *hiya* had an enlarged head like a *kobura* that could be filled with combustible oil. Otherwise an oiled cloth was wrapped around the arrow just behind the head and ignited.
- If firing into a castle or fort, the usual strategy was to fire a lot of fire arrows all at the same time to prevent the enemy from extinguishing the flames before the individual arrows burned out.

- But the point is this: during the entire medieval period arrow exchanges still dominated and arrow wounds still accounted for most of the casualties.
- During this period also, a new, more democratic use of the bow began to be seen, and these archers became known as *nobushi*, a word that does not indicate a particular group of warriors. The literal meaning of *nobushi* is 'those who hide in the fields'.
- Operating on foot, the *nobushi* archer of the 14th century would pick off individual warriors from the ground and this is where the idea of *ashigaru* actually comes from.
- One story of *nobushi* is when the skilled archer Sayo Saemon Noriie who was well versed in the *nobushi* tactics. During one battle he stripped off his armor he headed for a thicker as if it were to as if he too were a simple archer who operated solely on foot. He concealed himself within the bushes on the ridge and while hidden in the shadows he took aim at General Nogoe Owari no Kami and waited to loose his arrow. The general disposed of three enemies and having wiped away their blood using his helmet flag he opened his fan and sat motionless as the archer drew ever closer with his bow. At last, he pulled back the string to release the arrow, which hit its target right in the middle of his forehead a little below the helmet, and the mighty general, of course, fell down dead.
- The interesting thing about the *nobushi* tactic was that high-ranking samurai who usually demanded to be on a horse would happily participate alongside the low-ranking samurai who were forced to fight on foot because of their status.
- One of the disadvantages if you were an archer on the ground, was that there were not a lot of places you could hide from the enemy archers, and the only thing you could hide behind were fixed shields although Japanese shields were not handheld devices such as in Europe but instead heavy wooden boards mounted in the ground some were known to have been made from looted temple doors. They could stop arrows but were not easily portable so they tended to be used for warfare from defensive positions. The lack of portable

shields was another major difference in the method of fighting between Japan and Europe.

- We have some pretty accurate records about how effective arrows were in battle. In a record of one battle in the first two years of the Onin War, the sample reveals that 52 people were injured. Of these eleven had spear wounds, there were five wounds from other cutting weapons, three wounds were caused by stones, and no fewer than 30 had arrow wounds.
- Bows were still found in active use on the battlefields of Japan as late as 1615 at the battle of Yao.
- If archery did not produce a direct hit or a mortal wound, the two competing samurai would try to grapple with one another, using the techniques later given the name *oyoroi-gumi* (armor grappling). This would usually result in the unhorsing of one or both, at which point the short katana was the weapon most favored for close-quarters fighting.
- So this was the reality of samurai warfare during the "golden age." A samurai was primarily an archer, with the sword as a secondary weapon.
- Mounted archers naturally preferred open ground on which to operate, where a horseman could then ride around, picking off foot soldiers at will.
- Yet at this point in history came the greatest challenge so far to traditional samurai cavalry tactics. Generals realized that a better way to use the numerous foot soldiers in their armies was to take away their edged weapons and give them bows too, which may have been a tactic they picked up from the Mongols who made extensive use of foot archers.
- This was the complete opposite of the notion of the elite mounted archer delivering one arrow with great precision—because now, with all the foot soldiers armed with bows, if you were running around on a horse in front of a line of hundreds of archers trying to kill one

person at a time, then you were quite a good target for all the foot archers to shoot at.

- So this is where we get the development of the *ashigaru*, whom the Taiheiki refers to as *shashu no ashigaru* ("light foot shooters"), the first use in Japanese history of the term *ashigaru*, a word that was later to be adopted to describe all infantry troops.
- If you are looking at the old histories and wondering where all the descriptions of sword fighting are, you will notice a distinct absence of sword mystique in the *gimkimonos*, where there is very little mention of sword technique, either from the saddle or on foot. It just wasn't who they were.
- A samurai was therefore *most unlikely to voluntarily abandon his bow for a sword*, particularly when his enemy still had the use of a bow, because, like the guy with the sword that Harrison Ford kills, you were just a walking target.

## 4. Guns – teppo and arquebus

Teppo/ Hiya (Chinese style guns)

- Let's talk about guns now and how they affected the battlefield once they were introduced.
- Often dismissed as ineffective and useful only for signaling or scaring enemy horses, Chinese-style teppo could still in fact pack quite a punch, and they began to be used heavily in battles soon after their introduction.
- As well as metal bullets made from iron ore and copper there have been numerous finds of bullets made from fired clay and others created from pebbles. Firing stone bullets may therefore explain some of the references to warriors suffering stone wounds.
- There is evidence for the use of firearms in battle in as early as 1542 which was the year before the Portuguese arrived with their arquebuses.
- This being said, firing one of the larger teppo was pretty dangerous, as they often would explode if there was any problem with the way they were loaded for example, and also a lot of warriors elite or otherwise didn't like them and didn't trust them, and much preferred using the traditional bow, which they were more used to fighting with and in which they were very skilled.
- In one battle in 1548 there was the use of the three-barrelled teppo that had been popular in Okinawa and during this battle the *ashigaru* were given three bullets and after these three bullets were fired they were ordered to drop their weapons and to continue the fight with other close-range weapons like swords or *kanazaiho* clubs.
- It was probably realized that the most effective use of the *teppo* was to fire organized volleys but enough references exist to confirm that





the *teppo* as genuinely regarded as a personal weapon for samurai and that proficiency in it could be highly valued.

- There are in fact several references to *teppo* being given as gifts to prestigious individuals. The weapons were not kept for show but were used for hunting for which accuracy in sharp shooting was required.
- The most prestigious individual in regard to this was the shogun Tokugawa Ieyasu who is credited with using some form of heavy *teppo* to bring down a crane that had settled on the roof of Hamamatsu castle. Onlookers expressed surprise that he could lift and hold such a heavy weapon.
- Oda Nobunaga was also another good shot with a *teppo* as he demonstrated when he put such a weapon into action for the first time during the siege of Muraki castle in 1554. His samurai were suffering casualties from shots fired by *teppo* in the castle's loopholes. The three apertures, which were providing the fiercest fire so Nobunaga resolved to silence them personally. Stationing himself on the edge of the moat he kept up a constant fire against the loopholes simply by exchanging one preloaded *teppo* for another. In his later years, Nobunaga would also survive two attempts on his life by assailants sharpshooting with *teppo*.
- The impact of newer weapons on Japanese warfare was much less significant than is commonly believed though. One study makes a comparative analysis showing that in the 14th century, 99% of all missile wounds were caused by arrows, and the rest were caused by stones.
- Arrows continued to cause 58% of all missile wounds until 1600 by which time arquebuses had finally come into their own and were causing 80% of projectile wounds. These figures suggest that even though arquebuses are conventionally regarded as having revolutionized Japanese warfare, the *yumi* continued to dominate the battlefield for many years after the appearance of firearms.
- You get one commander in the 16th century complaining, for example, that 'there is a lack of knowledge about *teppo* so we must

prepare for this in choosing those who have the ability to use gunpowder and those who have the skill to handle *teppo*.'

- This indicates that people were still much more comfortable using bows and arrows than the newer technology. This complaint also indicates that it was not always deemed correct to replace spears, bows, and arrows with firearms in battle. Rather it's concerned with the shortage of able operators. It is also noteworthy that the highly skilled archers were deemed to be too valuable to be required to give up their weapons in exchange for firearms.

## 5. The Mounted Spearman – the *yari*

Slides 25,26, 27

- Let's go on to one of the most significant developments in the way things changed for samurai and the way they fought. We've already talked about how they always saw themselves as mounted archers rather than swordsmen, and we have also seen that the *ashigaru* became increasingly more important in battle and were now armed more and more with bows and increasingly with *teppo* and arquebus. And of course, as we entered the Edo period we saw many of these same *ashigaru* basically merging into the official samurai class based on their achievements on the battlefield.
- In around the 1540s and quite radically, we finally see a move away from the samurai being mounted archers in favor of them becoming mounted spearmen. This was a huge change in the way the samurai perceived themselves in battle, moving away from their beloved *kyuba no michi* ideal.
- Once again there is a very practical reason for them to make this change, even though the bow never really disappears until much later, and this is the versatility and effectiveness of the spear in the hands of mounted horsemen.
- The spear, or *yari*, has a long history in Japan and was the usual weapon for the Chinese-style conscript armies of the Nara Period.
- It was increasingly by the *ashigaru* weapon squads that were introduced from the 1560s onwards but it was also around now they also became the samurai's individual weapon of choice as you can see from the many paintings and drawings of the period, this was now how samurai saw themselves.
- They were the most important samurai weapon from about 1540 onwards, by which time they had almost replaced the bow except in the case of very skilled mounted archers.

- The thing that brought about this change was the problem that somehow the samurai horseman had to hit back at the enemy bows and guns, and they had to do that by using their speed, mobility and sheer striking power in a shocking charge against the enemy *ashigaru*.
- The problem was that a samurai traditionally carried a bow, which was actually an encumbrance in hand-to-hand fighting, and even if the bow was given to an attendant, swords were of limited use from the saddle.
- So, in a dramatic change to established practice, the bow was abandoned in favor of the spear, and the mounted archer gave way to the mounted spear-man, who could charge at the enemy, spear anyone in front of him, and continue to attack others whether on his horse or on foot.
- Some mounted archers were still retained, operating as mobile sharpshooters, but the majority of samurai now carried *yari* (spears), fitted with blades that were every bit as sharp as their swords. *Yari* is sometimes translated as 'pike,' but the European pike was never carried by warriors on a horse, and in Europe, the pike as it was known was never used as extensively as it was in Japan.
- The *yari* thus gave the advantage of a weapon that was as useful on foot as on horseback and permitted the samurai to defend himself and take the fight to his enemies, in a way that the exclusive use of a bow had never allowed.
- Spear techniques from the saddle also meant that, for the first time in Japanese history, a samurai army could deliver something very like a Western cavalry charge. A cavalry charge has always been a feature of European battles and was very effective and terrifying against foot soldiers. They had been used from very early times, even in ancient Rome, but the cavalry in the west usually charged with swords and axes, not with spears.

- If you can imagine for a moment what it would be like to see a huge group of horses ridden by fully armored men with spears charging at you, you can understand how terrifying such a thing could be.
- During the Sengoku period the Japanese *yari* developed into a highly versatile weapon. It was swung freely from the saddle by strong and well-practiced samurai who controlled their horses using their legs just as the mounted archers did.
- Once again, as we saw with the bow, when you attacked someone else on a horse the best effect came when the other person was on your left side which was also the preferred attack mode for a mounted archer. Otherwise, the *yari* was held out to the right side of the horse in the right hand where it could be swung around or used as a thrusting weapon.
- When attacking *ashigaru* or other samurai on foot a *yari* could be used like a European lance. *Yari* with side blades also proved very useful for pulling a victim from his horse, and getting the other guy to be on foot meant he was going to be at a disadvantage and could be finished off by other mounted spearman or the guys on the ground who had bows, spears, and swords themselves.
- The *yari* could also be made into a makeshift ladder by jamming them into the wall of a castle or fort and using them to climb upwards.
- The blade of a *yari*, for which several types existed, had a very long blade that would sit deep and secure within the shaft, usually under a long metal collar, and was secured in place by a horizontal bamboo peg. A ring might be attached to the collar to allow a small identifying flag to be flown.
- Side-bladed versions of *yari* were common. A *kata-kami-yari* had one side blade of a crescent shape like a sickle, while a *jūmonji yari* had a cross-shaped blade with two side blades.
- The shaft would be about 3m long, and even though this was shorter than the *ashigaru* 'pike', a much longer spear blade could often be attached.

- Here is Honda Tadakatsu (1548–1610), one of Tokugawa Ieyasu's most loyal followers, and he is shown in this statue at Okazaki Castle holding a typical samurai's *mochi-yari*, which was a spear of medium length favored by mounted samurai during the Sengoku Period.



## 6. Naginata

- When we talk about spears, there was also a closely related weapon much beloved of the samurai, which is of course the *naginata*.
- Its quite an old weapon, and we have early references to it from 1146 (which is the late Heian period). According to some artwork from the 13th and 14th century, the *sohei* (or warrior monks) are depicted with *naginata* but no special significance has been added to it.
- In the late 12th century during the Gempei War the *naginata* was very highly regarded due to the increasing cavalry battles, as the weapon was more effective in dismounting and disabling riders than bows and swords.
- In 1543 with the introduction of firearms the use of *naginata* in battlefields decreased and was replaced by *yari* (spear). During the Edo period, it saw an increased usage among samurai women who were expected to defend their home while their husbands were away.
- In fact, all Japanese women were expected to master fighting with *naginata* by the age of eighteen. The length of the weapon enabled women to stay further away from attackers so it's only logical they used it.
- When using a *naginata* the momentum of the slicing stroke would have required a return swing to bring the blade back in a new direction from which a further blow could be delivered. The heavy iron ferrule at the base of the naginata shaft was also capable of dealing a significant blow and the overall movement of the weapon in the hands of a skilled operator would be a series of rotations.
- It is these rapid changes of cutting direction that probably gave rise to the idea that these supreme use of a naginata by an expert was to whirl it quickly in one direction like a spinning water wheel. If the

whirling technique was performed speedily enough, legends claimed, it could even enable the user to deflect volleys of arrows fired at him.

## 7. The Mounted Swordsman?

- I know I have been unkind to Tom, and I have to tell you now that there were indeed times when people charged into battle waving their sword. When did this happen though?
- From what history teaches us, most of the references to warriors charging on a horse with only a sword, such as in Tom Cruise films, happen when people are cornered and cannot escape. So for example these were basically surprise moves to try and effect some sort of escape from the situation by throwing open the gates and charging straight at the enemy who was besieging you.
- One example of this that has come down the pages of history to us was when the military commander Shibata Katsune (1522–83) was trapped inside Chōkōji Castle in 1570. All hope of relief seemed gone, so in a dramatic gesture he smashed the castle's water-storage jars, presumably so his forces had to leave anyway, and led his samurai out in a death-defying charge with their unsheathed blades gleaming.
- But this kind of thing was unusual, and not recommended to say the least.
- Why? Because sword fighting from a horse was never easy. The normally two-handed *tachi* had to be used in one hand, and even though you had the advantage of being on a horse and thus above your enemy when you slashed at him, it was pretty simple for your enemy to move out of range, particularly if he had a long *yari* or a bow.

## • Odachi and/or nodachi

- So let's talk swords for a moment and the use of swords on the battlefield and particularly some of the most unusual weapons ever made, by which I mean the *odachi*, or extremely long *tachi*.
- Now consider this for a moment. I am 179 cm tall. Most of the *odachi* were at least that length, often six *sun* or 181 plus cm long. Some were over 2 meters, and could only have been used by extremely strong samurai due to their length and weight.
- The extra-long *odachi* or *nodachi* were most used by warriors on foot, of course, for bringing down horses. It is difficult to envisage how they could be used by horsemen at full gallop because the length of these weapons made them very top-heavy. Often they were not sharpened, so they were more like getting hit by a club or a mace, and if swung by someone strong enough the blow could be quite devastating.
- Sometimes used on horseback, God knows how, it allowed the horseman to reach down at his victim. And they certainly gave you a lot of reach, which could be an advantage also if you were on foot and had enough room to swing it.
- There were even several descriptions in the literature of *odachi* being used by samurai in one hand, which would have meant that these individuals were exceptionally strong and highly skilled.

## 8. The Sword in Battle

- So let's finally discuss the use of the sword in battle. When did this happen though? When did you pull out your sword and start laying into the enemy?
- Well basically, if you had any brains at all, you pulled out your sword when you had run out of arrows, or had otherwise lost the use of your bow or your spear, and you were on the ground without your horse and now you either ran for your life (not very brave) or fought for your life.
- The word usually used for the long sword carried by samurai in this early period is *tachi*. This was the samurai's principal sidearm.
- What we see being worn on picture scrolls such as *Heiji Monogatari emaki* are the *tachi*, which is slung from a separate sword belt with the cutting edge downwards, and the shorter weapon, which is stuck through the wide sash-like belt around the waist of the armor.
- There was, however, another type of sword coming into use, called an *uchi-gatana*. This was like a short *tachi* or a very long *katana*, and it was carried in the same way as the *katana*: that is, thrust through the belt.
- Originally used by warriors too poor to afford a *tachi*, it was eventually to supplant the *tachi* as the weapon of choice, as its size and position enabled the wearer to make a devastating stroke straight from the scabbard. With its name shortened now to *katana*, it became the most familiar form of samurai sword.
- However, as you can tell by the phrase *kyōba no michi*, a samurai's worth was measured in terms of his prowess with the bow, and later the *yari*, rather than the sword.

- Now, to the modern mind, any idea of a samurai is always combined with that of a sword. These two ideas are inseparable, and pretty well summed up by Tokugawa Ieyasu who gave us the famous quote that the 'sword was the soul of the samurai.'
- The sword has acquired a quasi-religious, almost mystical, symbolism, and the way it is used often appears to be a combination of superhuman skill and technical perfection. Particularly in Japan, and particularly later in the Edo period, it is the romantic weapon and the whole later samurai mythology, and it is a mythology, is based around it.
- But between the tenth and twelfth centuries, all the traditions to be associated with the Japanese sword lay in the future, including all the stories of invincible swordsmen like Musashi et al. Ironically, it is the age of peace, the Edo period, that is the real age of the sword, as we are going to discuss.
- But what we see from the 1540s, as the spears replace the bow – the reality is that we do not see a shift to swords as a primary weapon. Instead, swords are now secondary to spears, and most references to sword fighting are still concerned with fighting on foot.
- At this period also, and please remember we are talking about battles here, the lone warrior was less prized as an individual fighter than at any time in Japanese history. The great "individuals" of the Age of Warring States were men who commanded others and set an example by the excellence of their fighting in battle, rather than samurai renowned for selfish feats of individual glory. In fact, if a very talented warrior broke ranks during a battle to go out and seek glory for himself by killing some important general or other on the other side, this was often seen as a very selfish act by his commanders, as he was more useful as part of the main force than to risk going off and getting killed when they needed him most.
- If you are in any doubt about this attitude to the use of the sword in battle, have a listen to the great swordsman himself! Musashi, who had fought in battles himself, writes in his *Gorinshō* (The Book of Five Rings):





*"You should not have a favourite weapon. To become over-familiar with one weapon is as much a fault as not knowing it sufficiently well."*

So this is Musashi himself, the great swordsman, basically saying that you needed to be an all-round warrior with different weapons in your tool kit and prowess in several things to be really effective on the battlefield.

## 9. The age of peace and the 'Wandering Swordsman'

- In the age of peace that followed in the Edo period, this is where our modern idea of the samurai developed, as well as the concept of the sword schools and the master swordsmen, who held great prestige in the period.
- There is no more popular image of the lone samurai than that of the wandering swordsman, traveling from place to place, fighting duels, and then wandering once more, such as in movies with the great actor Toshiro Mifune in such films as *Sanjuro* and *Yojimbo*.
- Most of these wanderers, like Toshiro Mifune portrayed, are *ronin*, literally "men of the waves" samurai who have no master, owing to the destruction of their clan in battle, the disgrace of their master, or just being fired.
- The "seven samurai" for example in the famous film which is set in the year 1587, are all *ronin*, and endless wars that led up to the Edo period meant that there was no shortage of unemployed samurai seeking work for their swords.
- The background to Seven Samurai is therefore an accurate one, although most actual *ronin* did not wander for long. *Daimyo* competed with each other for high-quality men to defend and expand their territories.
- However, the real "wandering swordsmen" of history were usually not *ronin* at all, but *kenji* (master swordsmen) like Kamiizumi Nobutsuna, who chose not to serve a particular master. They had a completely different objective, and it was from these men that the sword schools that really perfected the art of the sword and produced the great swordsmen really developed.
- These guys roved the land seeking to challenge worthy opponents and thereby achieve two goals: to develop their skills as swordsmen and to elevate their practice of swordsmanship onto a spiritual level.

- This wandering in search of physical and spiritual self-improvement often took the form of a *musha shugyo* (warrior pilgrimage). This practice was much akin to the common Japanese practice of making long religious pilgrimages to distant parts, thereby obtaining spiritual enlightenment through endeavour and personal discomfort.
- The typical "sword pilgrim" was likely to have had some service to a *daimyo* and some battle experience behind him before setting off. His wandering could last for several years, and might include temporary spells of military service and some teaching. Austerity and abstinence were the hallmarks of the pilgrim warrior, whose travels would invariably involve duels, each of which taught the swordsman a little more about himself. In many cases, the wanderer would develop a technique that was uniquely his own. This he would attempt to pass on to a chosen pupil, or he might even found an entirely new *ryuha* (style) of sword fighting.
- The Age of Warring States was accompanied by a peak of achievement in the manufacture of the weapons the samurai were to employ, notably in the field of sword making. Compare any museum's rusty specimens of medieval European knights' swords with their gleaming Japanese contemporaries, and it is easy to see how the weapon acquired a legendary life of its own.
- Even its making is shrouded in mystery because none of the great sword-smiths ever wrote down their secrets. Everything was passed on from master to favored pupil, based entirely on practical experience gained over centuries, and without the guidance of any modern metallurgical or other scientific principles.

## 10. Conclusions about battle methods

- I am not going to dwell on how the sword was made, but I would like to sum up a little at this point some conclusions that can be reached from what we have talked about so far today.
- There have always been a lot of misinterpretations about Japanese warfare and the samurai's weapons and there have been a lot of political reasons for this in the past.
- For example, when the Imperial Japanese army was fighting China and Korea during the Meiji period, much emphasis was laid on citing any historical evidence that supported the idea that the Japanese had always preferred close combat fighting to long-range weaponry. This, it was hoped, would spur on the young conscripts to undertake death-defying 'banzai' charges against modern firearms in the name of the emperor.
- However it would seem that the use of samurai weapons has always involved a mixture of armaments and techniques and this was expressed in a very matter-of-fact manner towards the end of the Sengoku period. Many commentators of the period actually said out loud that for long-distance fighting bows and arrows and guns were more useful than close-quarter fighting, that for close-quarter fighting spears and polearms were best, and when fighting was hand to hand short swords or daggers were best.
- So sometimes distance weapons like bows and guns predominated and at other times close quarter combat was needed.
- The most important trends in Japanese warfare between the 10th and 16th centuries were therefore not the introduction of new weapons, but the deployment of larger and larger armies and a complementary development of military organization to be used on the battlefield as those newer weapons came to be more used.

- The interesting thing is that even as these new weapons were introduced, the older weapons were never completely eliminated, instead there was a progressive integration of new weapons into the samurai's 'toolkit' with decisions made about their use being made on the effectiveness for the particular situation at hand.
- There was also a certain sense of nostalgia among highly skilled warriors for the weapons they knew best, and this particularly meant the bow, which was never completely phased out and still treasured by warriors for centuries as the most elegant and effective of weapons.
- When we speak about changes in warfare, there was also a significant change in how the *ashigaru*, or foot soldiers/archers were used.
- One of the biggest and most controversial changes was from the 1550s onwards, the *ashigaru* bows were augmented by firearms, but for these to be effective the *ashigaru* had to be placed at the front of an army, the position traditionally occupied by the most loyal and glorious samurai.
- There was much honor attached to being the first to come to grips with an enemy. To place the lowest-ranking troops in such a position was a challenge to samurai pride, even if the overall plan was for the *ashigaru* fire was to merely break down the enemy ranks to prepare for the big charge of the mounted samurai, at which point the samurai spear and sword would dominate the fighting.
- However by the 1590s, however, putting these guys, the *ashigaru*, at the front of an army had become commonplace, showing a profound difference in military attitude. Not everyone approved, and in some chronicles, you get these rather snobbish remarks like:
- "Instead of ten or twenty horsemen riding out together from an army's ranks, there is now only this thing called *ashigaru* warfare."

- This "thing called *ashigaru* warfare" was of course nothing less than the emergence of large-scale infantry tactics, and it was exactly what was going on in Europe at the same time in sixteenth-century Europe.
- However, although infantry warfare became increasingly common, it never completely replaced mounted warfare, largely because successful generals had to use a combination of both to their best advantage. But one other more subtle factor was at work: throughout Japanese history, most generals had cherished the notion that samurai were innately superior to foot soldiers, and samurai had traditionally been seen as primarily mounted men.
- As noted earlier, the popular notion of the samurai swordsman, so beloved of the movie industry, owes more to the time when wars had ceased than to the reality of the battlefield.





## 11. Knight vs Samurai

- Both knights and samurais had their unique weapons, and these weapons played a crucial role in their battles. Knights were primarily known for their swords, axes, lances, and maces. The swords of the knights were long, heavy, and sharp, while their axes and maces were used to crush their opponent's armor.
- In contrast, samurai were known for their mastery of the *katana*, the *short sword*, and the *bow and arrow*. The katana, in particular, was a deadly weapon, and samurais trained extensively to master it.
- Swords were the most common weapon used by knights in hand-to-hand combat. They were designed for both cutting and thrusting and were used to strike at the enemy's head, arms, or legs.
- Knights often carried a longsword, which could be used with two hands or one, or a smaller sword, which was used for closer combat.
- Samurai used the katana in a variety of ways in combat, depending on the situation and the opponent. The curved shape of the blade allowed for a fluid and efficient cutting motion, which made it an effective weapon for striking at the enemy's head, arms, or legs.
- One of the key techniques used by samurai in combat was the "draw cut" or "ini," which involved quickly drawing the katana from its scabbard and making a single cut before returning the blade to the scabbard. This technique was often used as a surprise attack against an unprepared opponent and was highly effective. This could not be used by knights.

## Armour

- A knight's armor was typically made up of several components, including a helmet, breastplate, pauldrons (shoulder armor), gauntlets, greaves (leg armor), and sabatons (foot armor). The armor was designed to cover as much of the body as possible while still allowing the knight to move and fight effectively.
- The armor provided protection against a variety of weapons, including swords, axes, and spears. Metal plates were especially effective in deflecting blows, while chainmail offered protection against piercing weapons like arrows and daggers.
- Armor was not foolproof, however, and knights still suffered injuries in combat. Blows from heavy weapons could still cause injury or knock the knight off their feet, and armor could be penetrated by the point of a spear or the tip of an arrow.
- In addition, armor was heavy and could be tiring to wear, especially in hot weather.
- The armor worn by Japanese samurai, known as "o-yoroi," was designed to provide protection in battle. It was made up of several layers of materials, including leather, metal, and silk, which offered protection against various weapons and attacks.
- The samurai armor consisted of several components, including a helmet, chest protector, shoulder guards, arm guards, thigh guards, and shin guards. The helmet, or "kabuto," was made of metal and protected the head from direct blows. The chest protector, or "do," covered the torso and was made of several metal plates laced together with silk cords.

- As with the knight, while the armor offered significant protection, it also had some limitations. It was also heavy and could be tiring to wear for long periods, especially in hot weather. Additionally, some areas of the body, such as the back and the neck, were not well protected, making them vulnerable to attack.

## Who would win?

- Determining who would win in a battle between medieval knights and Japanese samurais is not an easy task. Both groups were skilled warriors who had their unique weapons, armor, and tactics.
- A samurai's strengths in a fight with a medieval knight include their speed, agility, and skill with the *katana*. Samurai were trained to move quickly and efficiently in combat, using their mobility to outmanoeuvre and strike their opponents. They were also skilled at using the *katana*, a versatile weapon that was well-suited to close combat.
- In comparison, the knight's greatest advantage was the fact that their armour provided significant protection from the slicing action of the samurai's katana. However, if the knight had only chainmail as their only protection, then the samurai could use the end of their katana to stab any vulnerable areas. Locations such as the neck, armpits, or behind the knees would be ideal locations to attack medieval body armour.
- However, samurai also had some weaknesses that a medieval knight could potentially exploit. One of the most significant weaknesses was their lack of heavy armor. While samurai armor was designed to protect against various weapons and attacks, it was not as heavy or extensive as the armor worn by medieval knights. This made samurai

more vulnerable to heavy blows or crushing attacks, especially from weapons like maces or battle axes.

- One of the most significant weaknesses of the knight was their lack of mobility. The heavy armor worn by knights could be cumbersome and tiring to wear, especially in hot weather, which could slow them down in combat. This would make them vulnerable to fast-moving opponents like samurai, who could use their speed and agility to outmaneuver them.

## Pros of Knights

- Knights were very difficult to defeat due to their high armor qualities and abilities.
- Knights used strong weapons and shields, which protected them during the battles.
- Their full body was shielded with a metal cover which kept their body parts safe in case of any attack.

## Cons of Knights

- The knights lost a lot of power by wearing heavy armor made up of metal, making it difficult for them to move.
- Knights used horses to ride, and they could be hurt badly if they fell off the horses.

## Pros of Samurai

- The samurai armor was light and made up of bamboo with some clothes and metal, making it easier for them to move as it was not heavy.
- Samurai were well-qualified in various combat abilities, which helped them during battles.

## Cons of Samurai

- Most of the weapons of samurai-like arrows cannot pierce into the heavy metal armor of the knights.
- Samurai were less protected and vulnerable than knights because of their light and thin armor.

## 12. Bushido

It would not really be right to talk about the samurai without talking about Bushido, the so-called 'way of the warrior,' which many historians now refer to as Bushido, but which is still taken very seriously by martial artists around the planet and in Japan too. So if you are shocked by what I am about to tell you, don't be, hardly anyone is aware of this apart from historians. It's a little bit like the company that successfully marketed the idea that tap water sold in a plastic bottle at thousands of times the price that it actually costs was better for you than the tap water you put in your glass at the sink. Even though it's the same thing.

Bushido is also one of these great marketing success stories.

Here is a fact to start off with though. Are you ready?

Before the 19<sup>th</sup> century, the word 'bushido' was used only very rarely in all of Japanese literature and did not refer to any one accepted 'warrior code', because there wasn't one. The samurai had their values, but there were many interpretations about what 'bushido' meant to them.

The word was first used in 1616, in a work called *Koyo Gunkan*, which was a military history of the Takeda clan. As we have discussed before, historically the word 'bushi' did not mean samurai, and they were actually distinct concepts with the former 'bushi' referring to simply soldiers or warriors. It is interesting that it was in the age of peace, the Edo period, that you get the first mention of this word, and not before.

In all the time when there were samurai, from the 10<sup>th</sup> century to the Edo period and right up to the Meiji Period, there is no mention of 'bushido' and/or the 'way of the warrior,' at all.

Not even by the guys that wrote all the books in the Edo period about how samurai were supposed to behave in the honorable and unselfishly loyal way that all the romantic novels said they were supposed to. Even these





guys, the most respected of the samurai class, the *kengo* and the philosophical leaders of the class did not refer to a concept of 'bushido' as a unified and accepted idea.

There is, also assumed in this idea of 'bushido', a deep connection to things like Zen Buddhism, so we need to maybe start here in order to understand all this better.

So in the 13th century, the Buddhist monk Dogen Zenji travelled to China and returned to Japan with what in Chinese was Ch'an Buddhism. Zen is a corruption of the Chinese word Ch'an, and the Soto school that Dogen founded today remains today as one of the two major schools of Zen.

Around the same time, the ruling Hojo clan in Kamakura came to power with the first shogun Minamoto Yoritomo and political strife between the court and the bakufu raged. The *bakufu* had a strong desire to distance themselves from the emperor and did this not only geographically and by setting up shop on the other side of the country but also spiritually as well in aligning itself with an alternative form of Buddhism the newly founded Soto school of Zen Buddhism.

As the shogun was the leader of the samurai class, such favoritism naturally connected Zen with the samurai class. However, it did not make all samurai Zen Buddhists or generate even much interest among the sword-bearing class. The whole concept of zen did not sit well with a military class.

Perhaps this sort of religious school with its emphasis on sitting meditation or *zazen* and its emphasis on compassion and peace didn't appeal. The truth was also that Zen teachings were just too difficult and complicated for many low-ranking warriors to take in, and while a good percentage of these men had religious ideas, they found far easier-to-understand paths in the simpler Buddhist sects such as Nichiren.

This, in fact, was pretty much where Zen's association with samurai and the martial arts ended.

It obviously it makes total sense that the samurai want to improve their mental focus on the battlefield, for which things like *zazen* are useful, but the contradiction between the martial arts and the religion of calm, compassion and non-violence was just too great for them to be compatible.

Attention should be given to what the writers of the time had to say: people like Yamada Soko, and the philosopher Kumazawa Banzan, and even guys like Yamamoto Tsunetomo, the author of the widely read *Hagakure*, all of them said repeatedly that Zen Buddhism was not suitable for warriors.

But then it all starts to change, and the reason for this is simple: nationalism.

Interestingly during the military period of the early 20th century when the connection between Buddhism and Bushido was suddenly ramped up, the *Hagakure*, which actually had as its idea that being a samurai was in conflict with Zen Buddhism, and that Buddhism was 'for old men' was mandatory reading. And the book even made it onto Mishima Yukio's bedside table where he noted that he read from it on a daily basis. Even when there are comments such as 'the way of the warrior is death,' this does not refer to an accepted code of ideal warrior behavior and is, rather, simply an observation.

The reforms of the Meiji period had made the samurai essentially redundant as the newly conscripted imperial army took control of matters of war, and also the enforcement of imperial law. Gradually the samurai's hereditary stipends and privileges were stripped away and the whole class began to fade into irrelevance and decline. Tales of drunken, incompetent samurai lounging around in tea rooms and brothels proliferated in the press, and in the public mind the common people, who had always disliked samurai and viewed them as their oppressors, were only too happy to see this whole class slide into the dustbin of history where most people thought they belonged.

However, this degrading of the powers and prestige of the samurai were not completely without regret on the part of many Japanese, many of whom viewed them and their historic ideas with nostalgia and longed for a way to revive, if not the class itself, then at least it's vaunted notions bravery, loyalty and devotion.

The romanticized image of the samurai really caught fire in the 1890s, when a journalist turned statesman by the name of Ozaki Yukio (1858-1954) return to Japan after visiting England. There in the British monarchy,

in its museums and stately historical mansions, he saw a society that was still rooted in an idea of mediaeval chivalry, an idea which resonated deeply in him as he considered the samurai of his homeland and their ideals, and he began to write articles for the Japanese press as to how Japan had a chivalric system of its own that they could be proud of.

Ozaki and his colleagues campaigned to revive the ideals of the former samurai class and made popular the term 'bushido', which had hardly ever been mentioned before in all of Japanese history, and which they felt could be used to revive the imagined former ethical splendor not just of the samurai but of all the educated classes in Japan.

These ideas began to be immensely popular with many Japanese who at the time were experiencing a period of great disillusionment as they compared themselves to the more sophisticated and militarily powerful cultures of China and even more so to the West.

Following Japan's surprising success in the Sino-Japanese War of 1894-95 and later in the Russo-Japanese War of 1904-05 the stage was set for Bushido to enter the wider public domain, and now many organizations took up the rallying cry demanding categorically that Bushido or 'the way of the warrior', and later 'Imperial Bushido' were in fact the soul of Japanese patriotism, even though no one had ever heard of this idea before.

So leaping quickly onto the Bushido bandwagon came various sporting educational and other groups that claimed links to Bushido which somehow magically stretched back into the hoary mists of time in order to burnish their patriotic credentials.

One such organization was the Great Martial Virtue Association (Dainippon Butoku-kai) founded in Kyoto in 1895 in an attempt by the government to solidify, promote, and standardize martial disciplines and systems throughout Japan. It claimed over one million members in its first ten years of activity, and martial arts groups representing kendo, judo, and karate, to name, began promptly promoting their own nationalist natures and busily fabricated resumes of supposed historical links to bushido and to Japanese martial glory.

Just as the martial arts groups had clamoured for admission to the Japanese nationalist mainstream by cooking up links to the imaginary 'way of the warrior,' Buddhist groups, which had seen their beloved beliefs relegated to foreign religious status by ardent Shinto nationalists, began to affirm their ties to Bushido, seeing this as a means to reassert their religion as having a deep Japanese nature and thus affirmed devotion to the nationalist cause.

It was not long then before the linking of Bushido, Zen, and the martial arts was established as a truth that could no longer be questioned in the Japanese mind, and this link was pursued for years as a central tenant of Japanese values right up to and throughout the years of World War Two, where nationalist values were instrumental in pushing the country along the road to disaster, and of course later on after the war this became a concept that was marketed to the West, particularly by the highly influential Zen Buddhist writer and thinker Suzuki Daitetsu in his masterwork *Zen and Japanese Culture*.

One cannot really blame people for swallowing the romantic idea of the perfect warrior as this had been one of the most enduring themes in literature not only in Japan but the West since the Viking sagas and the tales of Arthur and his Knights in Thomas Malory's 'Le morte d'arthur', the powerful mix of eastern philosophy with the martial arts is an idea that has gone unquestioned now for decades. In the case of Bushido it soon grabbed the attention of Hollywood as exemplified in many of the ideas behind the Jedi of Star Wars fame and the sprawling historical sagas from the TV series *King Fu* to *The Last Samurai*, that found success using the same recipe.

After all, as I say in my book, the facts should never get in the way of a good story.





●研修参加者

項番	氏名	男・女	資格・所属
1	吉田武晴	男性	全国通訳案内士
2	長谷川範子	女性	全国通訳案内士
3	菊地くに子	女性	日本文化体験交流塾専務理事
4	渡辺保男	男性	全国通訳案内士
5	白根妙子	女性	全国通訳案内士
6	柴田宜秀	男性	全国通訳案内士
7	入江高宏	女性	全国通訳案内士
8	春名直美	女性	全国通訳案内士
9	福岡ユキ子	女性	全国通訳案内士
10	川村貴美江	女性	全国通訳案内士
11	酒井丈嗣	男性	全国通訳案内士
12	川名亘子	女性	全国通訳案内士
13	井上純子	女性	全国通訳案内士
14	大沼明	男性	全国通訳案内士
15	田代朱美	女性	全国通訳案内士
16	山本悦可	女性	全国通訳案内士
17	久保谷智子	女性	全国通訳案内士
18	築田徹子	女性	全国通訳案内士
19	長谷川真美	女性	全国通訳案内士
20	前田朋子	女性	全国通訳案内士
21	中島稔	男性	全国通訳案内士
22	稲本理恵子	女性	全国通訳案内士
23	寺澤和美	女性	全国通訳案内士
24	高橋真里	女性	全国通訳案内士
25	阿部弘彦	男性	全国通訳案内士
26	森本潤子	女性	全国通訳案内士
27	東山崎祥子	女性	全国通訳案内士
28	服部豊	男性	全国通訳案内士
29	後藤潤子	女性	全国通訳案内士
30	瀧内健治	男性	全国通訳案内士
31	逸見礼次郎	女性	全国通訳案内士
32	檜垣徹	男性	全国通訳案内士
33	藤野俊光	男性	全国通訳案内士
34	諫早聖美	女性	全国通訳案内士
35	青木茂	男性	全国通訳案内士
36	原野葉子	女性	全国通訳案内士
37	四方恭子	女性	全国通訳案内士
38	有田美枝	女性	全国通訳案内士
39	今村明美	女性	全国通訳案内士
40	奥山尚子	女性	全国通訳案内士
41	服部次郎	男性	全国通訳案内士
42	福岡雅巳	男性	全国通訳案内士
43	秋山久子	女性	True Japan Tour 営業担当
44	井澤紘子	女性	全国通訳案内士
45	浅井久美子	女性	全国通訳案内士

●アンケート用紙

墨田区ガイド研修【2023/10/31】

この度は「ガイドのためのスキルアップ研修」にご参加頂き、有難うございました。  
お手数ですが、下記アンケート内容にお答えください。

**Q1. 墨田区エリアのガイド回数を教えて下さい**    ☐未だない    ☐ (    )回目

**Q2. 研修内容全体の満足度はいかがでしたか？**  
☐大変満足    ☐満足    ☐ふつう    ☐やや不満    ☐満足できない    ☐その他 (    )

**Q3. 今回の研修内容について、ご感想をお聞かせください。**  
**●講師について**  
☐とても良かった    ☐良かった    ☐ふつう    ☐やや不満    ☐不満  
その理由は?  
  
**●実地研修について**  
☐とても良かった    ☐良かった    ☐ふつう    ☐やや不満    ☐不満  
その理由は?  
  
**●その他 全体を通してのご感想・ご意見をお聞かせください。**

以下、《ご自身のお仕事について》お聞かせください

**Q4. 通常の業務の依頼は、どこからのお仕事が多いですか？【複数回答可】**  
☐ [海外の旅行会社]    ☐ [国内の旅行会社]    ☐ [所属の協会、団体]    ☐ [県・市町村の観光課等]  
☐ [旅行サイト]    ☐ [友人・知人]    ☐ [観光案内所等]    ☐ [ホテルのコンシェルジュデスク等]  
☐ その他 (    )

**Q5. 主に、何名ぐらいのツアーが多いですか？**  
☐ [4,5名以下のプライベートツアー]    ☐ [12名以下の小グループ]    ☐ [20名以下の団体]  
☐ [21名以上の団体]    ☐ その他 (    )

**Q6. 今後、このようなガイド研修があれば参加したいですか？**  
☐是非、参加したい    ☐検討する    ☐あまり参加したくない

**Q7. 今後、どのような研修内容、どの観光地での研修を希望しますか？**  

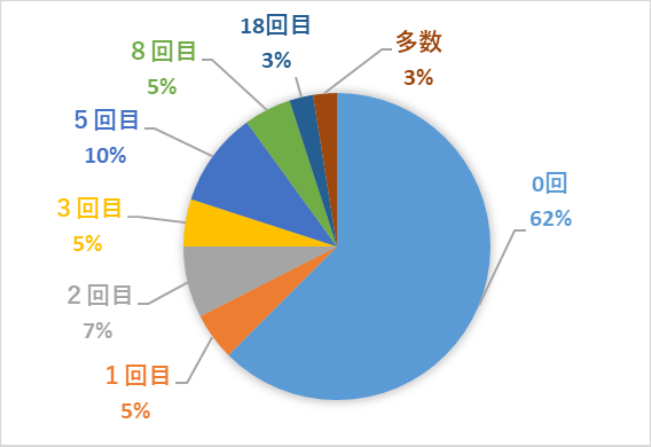
【研修内容】	【観光地】

ご回答者 氏名



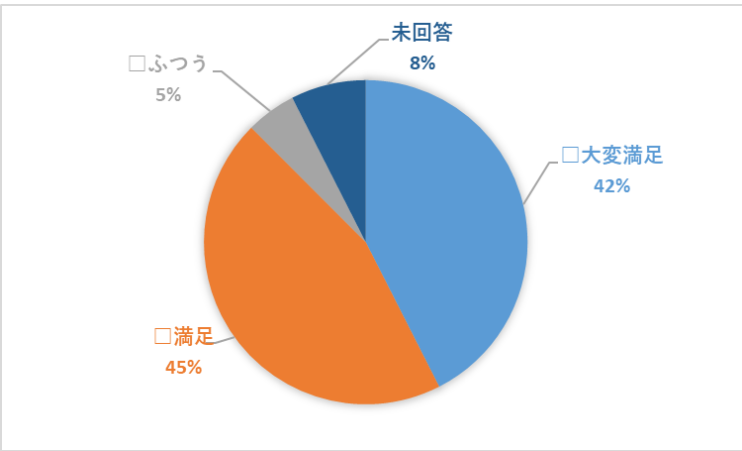
1.墨田区エリアのガイド回数

未だない	回数	回答数
2 5	1	2
	2	3
	3	2
	5	4
	8	2
	18	1
	多数	1



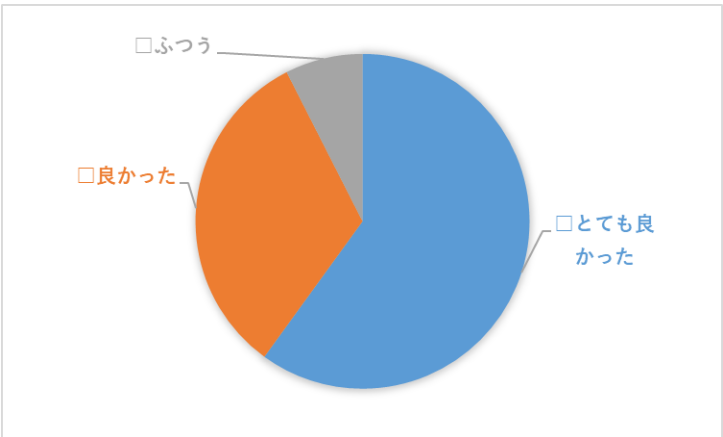
2.研修内容全体の満足度

評 価	回答数
大変満足	1 7
満足	1 8
ふつう	2
やや不満	0
満足できない	0
その他	0
未回答	3



3.研修内容についての感想

評 価	回答数
とても良かった	24
良かった	13
ふつう	3
やや不満	0
不満	0



研修内容についての感想の回答理由

Ash先生の視点が興味深かった
多くの情報を教えていただいた、きめ細やか
Ash先生の説明で、日本人の一般的な見方とは異なる見解を聞くことができた
花亀先生のお相撲の知識が豊富
米原理事の相撲や文化についての講義は素晴らしかった。文化と相撲についての知識が繋がった。Ash先生は日本人の思いつかない視点からの研修で良かった
しっかり説明していただいた
今まで知らなかったことをたくさん話してくださいました
武士道について纏まったお話が聞けた
大変わかりやすいお話と外国人目線の質問のご紹介等、役立つことばかりでした
時代ごとの特徴を大きな流れで説明するフレーズがたくさんありました
資料が丁寧に作られており、講話内容も良い
日本人と異なる視点での侍や武士道に対する見方が興味深かった



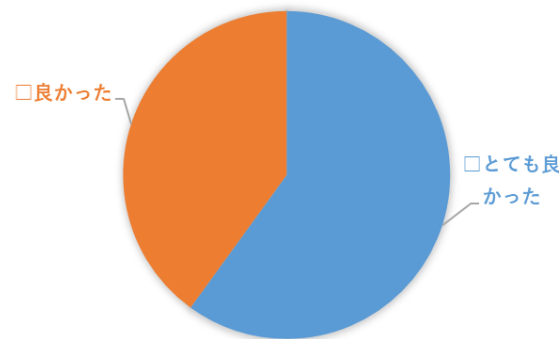


●実地研修について

評 価	回答数
とても良かった	24
良かった	16
ふつう	0
やや不満	0
不満	0

実地研修についての感想の回答理由

午前から内容が盛りだくさんだった
途中の道のりでフォトスポット等、最新の情報が得られたこと
相撲部巡りの移動でのガイディングのポイントを教えていただきました
ガイドの説明も詳しく大変良かった
位置関係が頭に入りガイドの際に役立つ
ガイドをするにあたってのポイントを簡潔に説明していただき良かった
詳しく色々な説明をしながらまわってくださって、とても面白かったです
木村先生のお話が多岐にわたり、ほんとうに面白くためになりました。刀剣博物館に国宝がありラッキーだった
短時間に効率よく練られたスケジュールでネットや本では経験できない貴重なひと時を過ごせました
細かい情報、ストーリーの組み立て方へのヒント等、盛り沢山でした
すばらしく詳しく感激した
場所確認以上に、街歩きでAチーム木村さんの情報が豊富で楽しかった
説明を聞きながら実物を目にする、臨場感が違う
今まで自分で足を運んだことのない場所や部屋を実際に知り、又その間でのトピックについても学ぶことができた



その他、全体を通しての感想

限られた時間で凝縮された素晴らしい内容でした
少し駆け足すぎてもったいなかったかもしれません。相撲と刀剣と分けてもいいのかもしれません
Ash先生のレクチャーも大変興味深かったのですが、自分の能力では半分も聴き取ることができませんでした。アーカイブ動画と共に講義メモも共有していただけると有難いです
午前講義、午後実習のスケジュールで良かったです
これまで相撲のツアーには参加していませんでしたが、今後勉強して、また今日の研修を活かして、ガイド経験を積んでいけたらと思います。本日はありがとうございました。
私はまだガイドになろうと思い始めたところで、街を歩く研修に初めて参加しました。実際に歩いてみて注意しなければいけないところとか、色々な知識とかガイドに必要なことが少しずつ分かってきて、ためになりました。
Ash先生とのQ&Aセッションは、質問者のやり取りで日本人の知っていることと、外国人の思っていることの違いを知ることができ、考えを深めることができ、心に響いた
相撲部屋を回り、相撲部屋の前で部屋や力士の話がきけて良かった
時間がかかりタイトだった。特にAチームは先に移動してからお昼という流れで少し大変だった
実地研修では、先生に直接質問できてよかったです
日本刀の鑑賞の仕方をもっと勉強しないといけないと思いました
今年ガイド試験に合格し、初めて研修に参加させていただきました。将来、相撲ガイドになりたいと思い、またこのような研修にぜひ参加させていただきたいと存じます
刀剣博物館と北斎ミュージアムでの解説（見所説明）があればもっと嬉しい
専門的な知識と実物を目にする、3次元的に物事が理解できて、定着しやすいと感じる。
侍、刀剣、相撲、全ての説明が素晴らしかったです。
非常に有意義であった。人数が多かったので、あともうひとグループ増やしてもらえれば、なお良かったと思う



## 4. 通常の業務依頼先

評 価	回答数
海外の旅行会社	10
国内の旅行会社	21
所属協会、団体	26
県・市町村の観光課等	2
旅行サイト	0
友人・知人	1
観光案内所等	0
ホテルのコンシェルジュデスク等	2
ガイドの仕事の経験まだない	4
未回答	3

## 5. ツアーの人数

評 価	回答数
4,5名以下のプライベートツアー	24
12名以下の小グループ	4
20名以下の団体	5
21名以上の団体	9
多様	3
未回答	6

## 6. 今後もこのようなガイド研修に参加したいか

評 価	回答数
是非参加したい	30
検討する	9
あまり参加したくない	0
未回答	1

## ●今後どのような研修内容を希望するか

入門/中級など分けて受講できると有難いです
地域振興（観光地開発）関連
落語研修
東京やゴールデンルート以外の日本各地に外国人ツアーリストを引き寄せるため、まずはガイドの皆様はその魅力を紹介していただきたいし、私も造詣を深めたい
刀について、刀鍛冶、玉はがね→刀にする
座禅を深める
藍染からジーンズへ
渋沢栄一の軌跡
ショッピング街、明治神宮、ポップカルチャー等の合流した街としての青山に魅力を感じます
鎌倉研修、可能であれば禅体験
墨田区の手工業（伝統的）の製造過程
相撲本所での研修
地域の歴史、今に繋がるストーリー、体験イベントの紹介
庭園の楽しみ方
新人研修以外でも日光箱根の研修を受けられたら助かります
アクセシブル研修
ナイトライフ・エンターテインメント
インバウンドのお客様は夜も楽しめるバー・ゲームなどお求めなので

## ●今後どのような観光地での研修を希望するか

都内
金沢、高知など
深川
上野、秋葉原
刀剣ミュージアムと安田ガーデンをじっくり
岐阜の関、鎌倉、福井、徳島から倉敷
戸隠、鬼無里（長野）、間人、伊根（京都）、出羽三山、善宝寺（山形）、常滑、半田（愛知）、三国湊、永平寺（福井）、下田、松崎（静岡）
スカイツリーの深川、富岡八幡宮
鎌倉
青山
飛鳥山、深谷など
新宿、渋谷、有楽町
新宿歌舞伎町など
神谷町ヒルズを含むエリア
浜離宮